世界選手権の出場権獲得！

日本チームは去る12月30日、パリで開催されたアジア第二次予選でサウジアラビアを31－19で破り、1995年5月にアイスランドで開催される第14回男子ハンドボール世界選手権大会への出場権を獲得した。男子ナショナルチームの健闘を讃えるとともに本大会での活躍に期待したい。（詳細は4ページに掲載）

男子世界選手権アジア第二次予選選手団名簿

団　長	井　薫	1938.5.29	常務理事（オムロン）
監　督	蒲生晴明	1954.4.5	日本ハンドボール協会（大同特殊鋼）
コーチ	田口　隆	1961.7.23	本田技研工業
コーチ	関　健三	1955.1.24	三陽商会
トレーナー	川波賢一	1958.5.1	濱脇病院

選手	氏　名	生年月日	身　長	体重	所　属
GK	橋本　行弘	1965. 9.17	186cm	81kg	本田技研
	林　康一	1967. 3. 3	181cm	78kg	大同特殊鋼
	井上　耕一	1967.10. 4	184cm	83kg	中村荷役
CP	堀田　敬章	1964.10.22	171cm	73kg	湧永製薬
	首藤　信一	1965. 1.10	188cm	85kg	大崎電気工業
	魚住　和彦	1966.10.24	188cm	80kg	大崎電気工業
	末岡　政広	1967. 9. 1	177cm	77kg	大同特殊鋼
	田中　茂	1967. 9. 2	182cm	79kg	三陽商会
	高木　浩司	1967. 9. 7	182cm	73kg	中村荷役
	渡辺　浩	1967.10.20	183cm	74kg	三陽商会
	三輪　澄高	1968. 1.31	188cm	85kg	トヨタ自動車
	田中　雅彦	1968. 9.21	184cm	82kg	湧永製薬
	中山　剛	1969. 7. 4	191cm	87kg	湧永製薬
	藤井　孝志	1969. 7.27	189cm	86kg	大同特殊鋼
	佐藤壮一郎	1969. 8. 7	178cm	73kg	大同特殊鋼
	岩本　真典	1970. 9.28	200cm	88kg	三陽商会

日本協会だより

平成6年度第2回理事会

日　時　平成6年11月19日(土)
　　　　11時～17時
場　所　東京体育館第二研修室
出席者　渡邊副会長、中澤専務理事、常務理事8名、理事2名、参事3名　合計15名

議題　部門別事業報告

1．部門別事業報告

(ア)　日本リーグ日程変更について
　世界選手権大会アジア大陸第三代表決定戦の12月30日フランス開催決定に伴う日程変更は、関係各位のご協力で収拾がついた旨報告あり。

(イ)　社会人大会（国体リハーサル大会）について［平成8年度より実施予定］
　参加チーム数はA種別（全日本総合選手権大会予選を兼ねる。参加資格は日本リーグ・学連・高専・高体連登録選手を除くA登録選手）男子32、女子12とする。
　B種別（いかなる上部大会にもつながらない。参加資格はA種別に同じ）男子24、女子12とする。

(ウ)　年度内各種大会について
　JOCジュニアオリンピックの12月開催について従来通りの3月開催の要望あり。来年度については普及委員会で再度検討することとした。

(エ)　指導委員会より「C級コーチ養成講習会3月開催予定」
　日本協会監修のビデオテープ「イマジネーションハンドボール」発売

(オ)　事業予算中間報告
　収支ともほぼ予定通りに推移している旨報告あり。

2．平成7年度登録について
　財政立て直しと、普及、強化費用の増額等の財源として登録金の見直しについて検討。必要性については了承。細部については更に検討し、2月理事会に提案することとした。
　尚、二重登録防止、登録実数の把握等の業務合理化のためのコンピューター導入について報告あり、更に検討することとした。

3．アジア大会報告と今後の強化方針について
　日本は男女共に2位に終わったが、大会運営は多くのボランティアに支えられ成功裡に終了した（ハンドボール競技の公式入場者は7千人）。
　日本対サウジアラビアによる世界選手権アジア第三代表決定戦を12月30日にフランスで開催決定。それに至るまでの経過について報告あり。今後の強化スタッフの問題、97熊本世界選手権チームの編成等については強化委員会と常務理事との話し合いを持つこととした。
　男子アジアジュニア選手権について報告。日本は韓国に続いて第4位に終わった。

4．平成7・8年度日本協会役員について
　評議員会の中に役員人選委員会が設けられ、検討を開始した。世界選手権大会の熊本開催を控え、平成9・10年も引き続き担当して貰う必要も考えられるので、次期役員は61才、評議員、監事は70才を目途に人選を進めるとの委員会よりのコメントが報告された。

5．97男子世界選手権大会招致委員会解散並びに組織委員会設立に

CONTENTS

【表紙】全日本総合選手権で女子最優秀選手に輝いた古田千明選手

ついて

12月2日に招致委員会解散総会、組織委員会設立総会を開催する旨報告。組織体形図案及び組織委員会規約案についても報告あり。

6．その他

(ア) 読売スポーツ賞について

本年度候補者については常務理事会に一任することとした。

(イ) 平成7年度ジャパンカップについて

平成7年6～7月開催で検討中との報告。

(ウ) 平成7年度全日本総合選手権

同大会の開催時期が女子世界選手権大会と重複するため女子の試合日程を変更。これに伴い女子の会場を神戸とすることを承認。

(エ) オーナー会議について

12月5日に小委員会を開催。今後の進め方について検討する旨報告あり。

12月度常務理事会

日　時　平成6年12月10日
場　所　東京体育館第二研修室
出席者　中澤専務理事、常務理事8名

議題

1．強化方針について

強化担当理事より経過報告後、強化スタッフを交えて97熊本世界選手権に向けての方針の検討を行った。

今後、更に検討を重ね、1月13日に再度打ち合わせを持つ事とした。

2．平成7年度登録について

福地学連理事長、佐分高体連部長よりそれぞれの連盟の問題点について報告。その対策も含め更に検討を行うこととした。

3．平成7年度各事業部門の行事計画と予算について

各部門の平成7年度行事計画及び予算を12月22日までに提出することとし、その予算は前年度予算を超えない範囲とすることとした。

4．95男子世界選手権アジア第三代表決定戦について

代表決定は12月30日にパリで開催されることとなった旨報告。このため20名の選手団は12月20日に出発。ストラスブルグ（フランス）で調整の後、試合に臨む事となった。尚、日本協会渡邊副会長、井常務理事、平岡国際委員は後日、現地で合流する。支援役員として竹野国際担当常務理事を派遣する件は別途検討する事とした。

5．日本スポーツ賞候補者推薦について

女子ナショナルチーム監督・緒方嗣雄氏を満場一致で推薦することに決定。

6．97世界選手権組織委員会設立について

12月2日に招致委員会が解散。直ちに組織委員会が設立された。日本協会選出の委員は日本協会役員の任期である3月31日までとし、その時点で交代することとする。実行委員及び各種専門委員の人選は現在検討中である旨報告あり。

7．オーナー会議について

オーナー会議の運営についてのオーナー小会議が12月5日、オーナー代表5名、斎藤会長、渡邊副会長中澤専務理事、関係常務理事4名、市原実連理事長出席で開催。オーナー会議の今後の運営について検討を行った旨報告。

8．ジャパンカップ開催について

平成7年度開催を目標に検討中。オーストリア、ドイツ、アメリカと出場について折衝中。尚、実行予算についても現在検討中との報告。

9．日本リーグ会計の一元化について

日本協会と日本リーグ会計の一元化について具体的な検討に入る旨報告あり。

以上

95世界ハンドボール選手権アジア第三代表決定戦について

苦労と努力の末、勝ち取った出場権

男子ナショナルチーム監督　蒲生　晴明

一．はじめに

今回の標記アジア予選開催については、数々の問題が生じたにもかかわらず、日本リーグ関係の方々、日本協会の役員の皆様の絶大なるバックアップのお蔭をもち開催にこぎつけたところである。関係の皆様方に心から御礼を申し上げたい。アジア予選の結果は、サウジアラビアに完勝し95世界ハンドボール選手権大会の出場権を獲得してきた。以下に予選までの経過ならびに試合内容を報告する。

二．予選までの経過（アジア大会以降）

アジア大会が終了し、国内のスケジュールが10月末から凝縮した形で始まった。しかしながら、標記予選開催について、IHF（世界ハンドボール連盟）とAHF（アジアハンドボール連盟）、日本、サウジアラビアの四者によって94年12月30日にフランス開催で合意になった。この時点では、日本リーグ後期第3週とバッティングしており、日本としては、国内のスケジュール変更を余儀なくされた。けれども、日本リーグの関係の方々の努力によって、日本リーグスケジュールの変更が可能になり、サウジアラビアに勝つためのナショナル活動として準備期間（12月13日～20日）が確保できた。また、11月には、日本リーグ開催中にもかかわらず2泊3日の短期合宿が広島・湧永製薬で実施でき、日本リーグ各チームの関係の方々に感謝しているところである。

さて、12月13日、大崎電気埼玉工場に集合して、強化合宿を1週間実施した。選手達はアジア大会終了後十分な休養も取らずに、国内スケジュール（国体・日本リーグ前期・全日本総合選手権）を継続していたけれども、本質的な疲労は蓄積された状態であった。しかし、12月30日の1試合に全勢力を注ぎ込むため、一人一人がかなりの自覚を持ってトレーニングをしていた。国内での合宿では、サウジアラビアの対策のみ立てて、トレーニングしていき、12月20日にフランス・ストラスブルグに入った。ストラスブルグでは、十分なトレーニングと練習ゲームを企画していただき、全日本チームとしてチームは戦術トレーニング、コンディション調整など、良好なステップアップができた。そして、12月29日にストラスブルグからパリへ移動して、次の日の本番に備えた。

三．試合内容

IHFからは、フランスの第一国際レフェリーのペアと立会い人としてフランス協会副会長が派遣され、AHFからはアブアルレール事務局長が同じく立会った。

ゲームは17時から始まった。立ち上がり、日本はディフェンスがよく、完璧な出来であった。しかし、オフェンスについては良い形でシュートするけれども、7本連続で失敗。通常、悪い方へムードが行きがちであるケースだが、シュートまでの課程が悪くないだけに差ほどの問題は感じられなかった。8分に速攻から末岡が決めると3連続ゴールの後、一気にサウジアラビアを引き離した。14－7と7点リードで終了かと思ったとき、残り2秒前にとどめを刺すように末岡がサイドからダイナミックなゴール。前半は15－7で折り返した。

後半になり、日本は確実に主導権を握り、着実にしかもトレーニング通りの内容でジリジリとサウジアラビアを引き離し、5分で11点差とした。その後一進一退の展開が続いたが、13分過ぎに日本は退場者が相次ぎ、コートプレイヤーが3人になるハプニング。しかし、この状況の中、ゴールキーパー林の超美技により何度も守り抜き、ディフェンスの頑張りもさることながら、林のキーピングには場内の観客を溜め息から大拍手に変えさせた程素晴らしかった。その後は、日本の一方的なゲーム展開になり、岩本・佐藤・藤井といった中堅メンバーが大活躍。31－19で締め括った。

アジア大会後、この一試合に照準を合わせ、戦術面では完璧なほど成功し、選手のみならずゲームとして成長の跡が実証できたゲームであった。日本国内のゲームでは、ディフェンス戦術やオフェンス戦術が数少ない中で、対サウジアラビアを想定した戦術トレーニングが、全日本チームとしての成長に大きな成果を及ぼしたということになった一戦であった。

四．おわりに

数々の問題が生じた予選であったけれども、1月1日に帰国した我々を出迎えていただいた専務理事以下常務理事の方々が、「全日本チームの勝利が、何よりのこと」と言っていただき感謝している。しかしながら、この問題はAHF、極東－中東、日本協会などの基本的な組織体制の改善ができなければ再び起こることは免れない。早急にこの問題の根幹について、日本協会で審議すべきであり、この対応策を検討していただきたい。いずれにしても、関係の方々のバックアップに感謝申し上げて報告とする。

■世界選手権アジア第三代表決定戦

12月30日

チーム	得点	前半・後半	得点	相手
全日本	31	15－7 / 16－12	19	サウジアラビア

■フランスでの親善試合

日付	チーム	得点	前半・後半	得点	相手
12月21日	全日本	22	13－8 / 9－14	22	セレスタ（フランス1部リーグ5位）
12月22日	全日本	28	15－9 / 13－10	19	バラン選抜
12月27日	全日本	27	12－10 / 15－10	20	ストラスブルグ（フランス1部リーグ4位）

第13回男子世界学生選手権大会報告

ロシアがトルコを下して優勝！

日本は13ケ国中11位に終わる

選手団長　福地　賢介





第13回男子世界学生選手権大会は、トルコ共和国イズミール市（イスタンブールから東方向へ空路で約1時間のエーゲ海に面したリゾート地）にて、13ケ国（当初は16ケ国であったが、ギリシャ、ブルガリア、モロッコ、アルジェリアが不参加。ブラジルが新参加）で行われた。

ロシアがナショナル選手ドミトリ・トロゴノフ（200㎝）をはじめとし、プロホチン・アンドロ（220㎝）、その他200㎝台（スタメン3名）を擁して高さの上にパワー、スピード、テクニックの三拍子そろった圧倒的なチーム力を見せて優勝した。2位は地元トルコ、3位ウクライナ、4位はフランスであった。

日本は、当初のグループ分けではA組でルーマニア、韓国、トルコとの対戦が予定されており、前回、その後の情報収集、チーム状況から、私なりに密かに7～8位は十分狙えると思っていたが、直前の組み替えから、優勝候補のロシア、ウクライナのC組に入り、大会関係者の「予選リーグのロシア対ウクライナが事実上の優勝戦では」と言う評でも分かる通り、皮肉な抽選の結果が出て、予選リーグでは完敗し、準決勝リーグに進出できず、9～13位決定戦にまわった。

予選リーグの組み合わせの変更から、30日のエアーフランスのフライトまで確認してパリへ応援に行く予定がキャンセルになり、どうなったかすごく気になっていた時、日本が圧勝と言うニュースが入り、安堵と共に、自分達もと気も新たに順位決定戦に向かった。

中華台北、イランに勝ったが、ブラジルとハンガリーに惜敗し11位であった。しかし、今大会に限ってみた場合、7位から12位までは全く紙一重と言って良く、再抽選の運不運が左右したと言える。

今大会でベスト4を除き、私なりに印象に残ったチームは、ユーゴスラビア、ブラジルであった。特に、ブラジルはスペインのコーチを受けているとのことであるが、大型で荒削りながら、パワーとスピードがあり、今後の上位進出が伺えた。

今大会は、過去の大会と参加までのプロセスをもとに、全日本学連として宍倉、松井、松の男子世界学生担当理事が、まずチーム構成を抜本的にねり直すことからスタートした。

過去のある面では総花的なと思われることや、地域状況を考慮した選手選考ではなく、限られた予算と日程の中でのチーム強化を考えると、大きな意味でのコンビネーション不足のクリアが最大の課題であり、学連としては、テスト編成ではあるが、ある程度の核になる選手の多い複数の大学を中心としたチーム編成を考え、選手選考に入った。コンビネーションのみでなく、スペシャリストの持ち味発揮も当然考慮された。

最終選考の前に韓国遠征を行った際に、説明不足から、一部に特定大学の選手が多すぎるのではとの声も聞かれたが、前述の事情からのものである。

アトランタ五輪出場を当面の目標に強化が進んでいる中、更にその先を見据えたトータル強化を背景とした選手選考に入った。

各地区学連から50名以内の選手をリストアップして第一次選考を行ってから、数次の選考を経て、最終的に16名（上野＝大体大、穴井＝国士館大はエントリー後に怪我のため不参加）に絞られたが、結果的に選考された選手は過去にジュニアに選ばれた実績のある選手が大半を占めた。

これを見た時に、井強化委員長、津川男子強化委員長、蒲生全日本監督の基本方針である日本のオリンピック出場目標のための一環強化として敷設された『ジュニアー全日本B－全日本』のレールのジュニア部門の関係者の努力への感謝と、大学界での更なる育成の責任をも感じさせられた。

今大会を見た時に、もう少し強化の時間があればとの思いはあるが、他国と比較しても前述のごとく7位から12位までは紙一重の状況であることや、サイドのスペシャリストである松本選手（168㎝）の大活躍等を見ると、当然反省材料は多々あるが、学連としては今回のチームの編成は一応の成果と見ている。

97年の男子世界選手権大会の熊本開催が決定し、全日本学生選抜チームも全日本Bと言う強化方針に応えられるべく、次代を

担う選手を学生界から一人でも多く送り出したいという気も、新たに湧出する思いであった。

当初、山崎正利団長（全日本学連理事）の予定であったが、健康上の理由から申し訳ないが辞退せざるを得なくなったとの事情からエントリー直前に私が団長になった経緯があり、偶然にも同じ年に開催された男女の世界学生選手権大会を経験させてもらい両大会の比較ができた。

技術的なことや試合そのものに関することは、松井監督の報告もあると思うので、その他の面で感じたことをアトランダムに記したい。

国民性の相違と言うとクレームがつけられるかも知れないが、女子（スロバキア）との比較で見ると、男子（トルコ）の場合は、最終エントリーの時や開会式での行進、関係書類の配布、観光、食事時の飲み物（毎食コーラ1本無料）のオーダー、その他の面でも、総体的にややアバウトな印象は否めなかった。しかし、各国選手団が同一宿舎（三つ星・ホテルバルチョバ）であり、中部大学が韓国との交流で知りあった選手と辰巳選手が旧交をあたためたようなことも含め、各国選手とか役員が円滑に交流できたことなどもあって、女子の時はチームによって宿舎に大きな差があって、不満の声（日本良好であった）も聞かれたが、そのようなことがなかった。

また、試合会場までのバス輸送の融通性とか、同一試合会場でのゲーム開催で観戦希望ゲームが随時に見られたこと、その他でも好印象材料が多々あったことは言うまでもない。

トルコ料理は世界の三大料理と聞いており、かなりの期待を持っていたが、宿舎での食事は、朝はビュッフェスタイル（質より量と言う印象）、昼食と夕食は二つのメニューからの選択と大会要項には記載があったが、選択ではなくて、ホテルのセットメニューであり、11日間の大半がマトン料理（牛肉は2回）で、この点では皆が閉口ぎみであった。

トルコ協会がエフェス・クシャダス等の観光をセッティングしてくれたが、観光バスで案内してくれただけで、ガイドがつかなかったために、具体的（案内書では一応の知識吸収はしていたので若干の内容は把握）なことが良く分からなかった。エフェスは世界に知られた遺跡とのことであるが、日本人観光客が5グループほどいてびっくりさせられた。

選手団との審判団の宿舎は異なっていて、市内のプレステージホテルであったが、毎日、日本人のツアーが宿泊していた。ツアーコンダクターから「トルコの治安の良さと、遺跡の多いリゾート地ということで人気がある」と聞かされたが、試合会場の周辺には、常時自動小銃を持った警察官の姿を多数見かけており、これで治安が良いのかとも思ったものの、大会関係者の話から、ユーゴスラビアのチームが来ており、念のためにユーゴのテロを警戒しているとのことで納得したが、此処でも国際情勢の不安の一部を垣間見せられた。

次回の第14回男子世界学生選手権大会は1996年12月27日より翌年1月6日まで、ハンガリーにて開催するが、ぜひ参加して欲しいと要請された。

先の女子世界学生選手権大会の選手団編成の時に総務とコーチ兼任をしてもらったことで、役員に過剰な負担をかけたことを反省し、今回は通訳兼主務で旅行代理店のコンダクターをオフィシャル登録しテスト採用したが、コーチの負担がないのみでなく、西山医科学委員長の推薦による温和な唐沢帯同トレーナーとコンビで、選手との潤滑油になってくれ、思わぬ成果もあった。

あのことも、このことも記したいと思うが、紙面の都合もあり、最後に無事の帰国報告と女子の世界学生選手権に引き続き、ご関係各位に多大なご支援を賜ったことを紙面をお借り致し、お礼を申し述べさせて戴きたい。

2月度行事予定

●大会

日程	行事	場所
2/3 ～5	日本リーグプレーオフ	東京
2/10～12	第26回全日本実業団男子トーナメント	呉
2/10～12	第３回全日本実業団女子トーナメント	呉
2/24～26	日本リーグ・ルーキーカップ	愛知・広島・栃木・熊本

●会議

日程	会議
2/4	平成６年度第３回理事会
2/11	平成６年度第２回評議員会

全日本学生ハンドボール選手権大会

男子第37回・女子第30回

男子 日体大が通算12回目の優勝
女子 東女体大が連覇で11回目

全日本学生連盟理事長　福地　賢介

高松宮杯男子37回・女子第30回全日本学生ハンドボール選手権大会は、11月22日より27日までの6日間にわたり、予選トーナメント・準決勝リーグ・順位決定戦方式によって、男女各24大学（女子は30回の記念大会により8大学増え24大学）が参加し、京都府宇治市の山城総合運動公園体育館（通称＝太陽が丘）において開催され、男女共に決勝は奇しくも昨年と同様の対戦となった。男子は、第二延長まで入ってやっと決着がついたが、死闘と言う表現のできるような熱戦が展開され、日体大が昨年の雪辱を果たし通算12回目、女子は東女体大が連覇し、通算11回目の優勝を飾った。

■男子・日体大と大体大が大熱戦

男子決勝戦は、12月にトルコ（イズミール）にて開催される第13回世界学生選手権大会に参加する全日本学生選抜（全日本B）チームに、小沢（横浜商工）、松本（金沢市工）、茅場（笠間）、辻（学法石川）、笹浪（金沢市工）、佐々木（拓大一）、森山（熊本市商）の7名を送り込みパワーと小技がマッチし多彩に攻める日体大と、学生界屈指のGK四方（北陽全日本学生）を要に、池辺（久工大附）、清水（桂）、石塚（岩井）、小林（小松工）などの大型の好ディフェンスを擁して、一線防御の堅い守りから相手のミスを誘い、スピード豊かで切れの良いフットワークの尾崎（北陽）、松村（桂）、柴田（岡崎城西）などの速攻で加点する大体大と、異なったチームカラーの対戦となり注目された。

接戦の予想にたがわず、日体大が茅場のロング、松本の回り込み、笹浪のポストなどで得点すると、大体大も日体大の3・2・1ディフェンスを松村、尾崎、柴田などのスピードで攻め、1点を争う好ゲームを展開。前半は日体大が11－10の1点リードで終わった。

後半の立ち上がりに笹浪、辻、奥秋（東根工）と3連続得点で日体大がリードしたが、大体大もすぐに反撃。早い帰陣で良く守ると共に、柴田、清水で加点し1点差まで追い上げた。その直後、また佐々木、茅場（7T）で差を広げた日体大が、3点差を保って残り5分弱まで経過した時は21－18。この後、大体大は日体大の攻撃を食い止め無得点に抑えながら、松村（7T）、柴田で1点差に迫った。しかし、29分7秒に痛恨の反則で7Tを取られ、万事休すと思われた時に、GK四方が絶妙なキーピングで凌ぎ、かすかな望みが得られた。この時、既に残り6秒。大体大のボールキープながら、流れから見て日体大の逃げ切りと思われた時、一瞬、日体大ディフェンス陣にマークのズレが生じ、中央で小林がノーマークに。知る由もないが第2延長に入る幕開けとなる起死回生の同点シュートが決まった。

延長に入ると、追いつかれた日体大の心理的な立ち直りが遅れたのか、大体大が押せ押せで荒木（境港工）、松村、尾崎の連続3得点や森山へのマンツーマンなどで優位に立った。延長前半4分40秒過ぎに石塚、池辺の連続退場があって、この間1点を返した日体大が、延長の後半立ち上がり大体大4人の間に1点を返して1点差にしたものの、流れは未だ大体大と思われた。しかし、この直後に大体大に不正交替による退場が発生。これで、また5人となり、この間に日体大が同点から26－25と逆転した。延長9分40秒に大体大も執念で竹下の同点ゴール。第2延長にもつれ込んだ。

第2延長に入って日体大は、笹浪のポスト、茅場のミドルで優位に立った。大体大も四方が森山の7T阻止とか、ノーマーク好捕を背景に追撃したが、疲れが見えはじめてか要のディフェンスの帰陣の遅れ、マークのズレが目立ち、そこを日体大が突いて連続加点。さしもの熱戦に終止符が打たれ、33－28で日体大が勝利を呼び込んだ。どちらにも優勝を与えたいような史上に残る好試合であった。

3位決定戦は、初の3位を狙う大経大が田中（育英）、萩原（初芝）などの活躍から、元気な攻撃を見せて常に主導権を握り、準決勝リーグでは松本（九州学院）の好リードで優勝した日体大をあわやのところまで追い込んだ国士館を30－26で破り、初の3位になると共に全日本総合選手権の初出場権をも獲得した。

準決勝リーグ第1ゾーンでは、春季に二部転落の早稲田大が、須

◇男子優秀選手

GK	小寺　勝矢	（日体大）
CP	小沢　勝利	（日体大）
CP	森山　透	（日体大）
CP	尾崎　修央	（大体大）
CP	松村　知彦	（大体大）
CP	田中　努	（大経大）
CP	松本　幸介	（国士館）

◇女子優秀選手

GK	遠藤ひろみ	（東女体大）
CP	山田美智代	（東女体大）
CP	梶田　華恵	（東女体大）
CP	小貫佳代子	（日体大）
CP	稲次　彩	（筑波大）
CP	甲斐万起子	（福岡教大）
CP	田村　啓子	（武庫川女大）

藤（浦和学院）などの若い選手の活躍で秋には一部復帰し、今大会でも準決勝リーグ3位に入り復活の兆しを見せた。また、昨年は準決勝リーグに3大学が進出し旋風を起こした東海勢も、今大会もと期待されたが、中京大が唯一の進出でやや寂しさは否めなかった。

第2ゾーンは、全日本学生のコンビの坪根（久工大付）、田中（同）を擁した福岡大、児島（福岡）、益崎（熊本市商）、広政（下松工・全日本学生）などで、幅のある攻めを見せた筑波大とおのおの持ち味を出して戦い、大きく開いた得点差が6点といった僅差の試合が展開された。結果的には日体大と国士館大が進出したが、紙一重と言ってよかった。

■女子・東女体大がまたも日体大を下す

女子は、昨年同様に東女体大と日体大の対戦となった。東女体大は前日までとは見違えるような動きを見せ、前半に山田（名短大附）の先制シュートにはじまり、常に先手を取って、前半に日体大に退場者が続いたと言う展開にも助けられ、優位に立って、その後も梶田（名短大附）、武藤里（名短大附）などが加点。何剣萍（元中国代表）のリードから、小貫（麻生）、後藤（日川・全日本学生）などで追う日体大を突き放して、後半15分には勝負を決するような思わぬ展開で11回目の優勝を飾った。

3位決定戦は全日本学生トリオの大前（小杉）、稲次（宣真）、小谷内（水海道二）などがコンスタントに力を発揮して進出して来た筑波大と、甲斐（大分雄城台）を中心にセオリー通りの忠実なハンドボールで、今大会の台風の目とも言って良い活躍を見せた福岡教大が対戦したが、地力に勝る筑波大が勝って3位を確保した。

優勝した東女体大、準優勝の日体大共に楽に勝ち上った訳ではなく、準決勝リーグで東女体大は武庫川女大に19－18で敗れ、得失点差で勝ち上り、日体大も大体大に敗れれば得失点いかんでは筑波大を交えた3大学の得失点差と言う事態を何とか引き分け進出したもので、それだけに今回の準決勝リーグでは1点に笑い、1点に泣くと言う1点の重みを痛感させられた試合が展開された。

田村（華陵）を中心に速い攻めを身上とし、優勝した東女体大に準決勝リーグで勝っている武庫川女大、特に切り札は見られないが、辻（洛北・全日本学生）をはじめ、切れのある選手を配し、思い切りの良い攻めを見せて、準優勝の日体大を最後まで苦しめた大体大のみでなく、予選トーナメント1回戦では、地元4大学が共に緒戦を突破し、小林（九州女子・全日本学生）、高嶺（具志川）などが安定した力を見せて準決勝リーグを戦ったが、不運にも主力の怪我で敗れた福岡大、初の3位決定戦に進出した福岡教大の九州勢との活躍が見られた反面、準決勝リーグに東海勢の進出がなかったのが目についた。

今大会では、男女共に日程的にノーシードの大学（今回の日体大男子）が決勝戦まで戦うと6連戦と言うハードなものである事や、今大会は主管の関西学生連盟の努力により6日間開催による体育館確保の困難さをクリアできたが、運営上の問題も合わせて大会開催期間、競技方式等の早期検討を痛感させられた。

大会成績

◎男子

▼予選トーナメント1回戦

東海大 27－20 名城大
東北学院大 34－23 福岡教育大
日本大 26－21 京都産業大
大阪経済大 30－21 函館大
中央大 28－25 中部大
天理大 34－17 道都大
日本体育大 28－20 東和大
新潟大 27－21 松山大

▼予選トーナメント2回戦

大阪体育大 33－10 東海大
早稲田大 28－16 東北学院大
中京大 26－11 日本大
大阪経済大 25－24 順天堂大
福岡大 22－21 中央大
国士館大 40－24 天理大
日本体育大 31－22 桃山学院大
筑波大 45－18 新潟大

▼準決勝リーグ第一ゾーン

大阪体育大 23－17 早稲田大
大阪経済大 25－20 中京大
大阪経済大 22－19 早稲田大
大阪体育大 25－23 中京大
早稲田大 26－23 中京大
大阪体育大 28－19 大阪経済大
（順位）①大阪体育大②大阪経済大③早稲田大④中京大

▼準決勝リーグ第二ゾーン

国士館大 26－26 福岡大
日本体育大 27－24 筑波大
日本体育大 30－24 福岡大
国士館大 27－23 筑波大
日本体育大 24－22 国士館大
筑波大 24－18 福岡大
（順位）①日本体育大②国士館大③筑波大④福岡大

▼3位決定戦

大阪経済大 30－26 国士館大

▼決勝

日本体育大学		大阪体育大学
33	11－10	28
	10－11	
	1－3	
	4－2	
	3－1	
	4－1	

◎女子

▼予選トーナメント1回戦

天理大 29－13 仁愛女短大
大阪教育大 24－22 東海大
中京大 21－16 東北福祉大
千葉明徳短大 26－12 広島大
関西外国語大 30－9 岩手大
関西女短大 22－14 茨城大
琉球大 44－6 北海道女短大
中京女子大 23－17 国士館大

▼予選トーナメント2回戦

日本体育大 32－22 天理大
福岡大 32－20 大阪教育大
筑波大 22－12 中京大
大阪体育大 33－9 千葉明徳短大
東京女体大 31－17 関西外国語大
福岡教育大 33－16 関西女短大
日本女体大 33－20 琉球大
武庫川女大 29－21 中京女子大

▼準決勝リーグ第一ゾーン

日本体育大 26－23 福岡大
筑波大 30－23 大阪体育大
大阪体育大 31－19 福岡大
日本体育大 29－27 筑波大
筑波大 30－18 福岡大
日本体育大 24－24 大阪体育大
（順位）①日本体育大②筑波大③大阪体育大④福岡大

▼準決勝リーグ第二ゾーン

東京女体大 26－23 福岡教育大
武庫川女大 23－13 日本女体大
福岡教育大 24－22 武庫川女大
東京女体大 25－21 日本女体大
福岡教育大 21－17 日本女体大
武庫川女大 19－18 東京女体大
（順位）①東京女子体育大②福岡教育大③武庫川女子大④日本女子体育大

▼3位決定戦

筑波大 27－23 福岡教育大

▼決勝

東京女子体育大学		日本体育大学
27	14－10	17
	13－7	

第3回JOCジュニアオリンピックカップ大会

男子北海道選抜 女子山口県選抜 優勝への道

第3回を迎え、もう一つの中学生の全国大会としてすっかり定着した未来の「オリンピック有望選手」発掘を第一の目的にしているJOCジュニアオリンピックカップ大会が大阪府堺市で開催された。

今回は3月の春休みに行われていたものを12月の冬休みに移行したこと、3年生も出場可能になったこと、以上2点が変更された。

連続出場選手もかなり見られ、中には3年連続出場を果たした選手も出てきた。

また、同一県のチームが出場している地域もある反面（男子：北信越・四国・九州、女子：東海・北信越・中国・四国）、全て異なる府県のチームが出場している地域もある。（男子：東北・近畿、女子：近畿）。これは、それぞれの都道府県での普及具合が反映しているといえよう。なお、女子で3連続出場の偉業を果たした矢田中学（東海・愛知）のみが今回も単独となった。

出場チームはこれまで通り、全国9地区（北海道・東北・関東・東海・北信越・近畿・中国・四国・九州）の代表に開催地（大阪府）を加えた男女10チーム。

先に記したように3年生も出場が可能になったことで、チーム編成にもかなりの広がりが見えてきた。即ち、3年生のみの選抜、2年生のみの選抜、3年生と2年生との選抜、3年生と1年生との選抜、全学年の選抜と5つのパターンで出てきた。



元気に選手宣誓

■男子

▼1回戦

群馬県選抜―沖縄県選抜

沖縄県の攻守ともにまとまりのある組織プレーが目立った。群馬県は経験の差が出たゲーム。

岩手県選抜―山口県選抜

岩手県はエースが10点と頑張ったが、前半15分過ぎから後半8分までの連続10失点が痛かった。

▼2回戦

奈良県選抜―沖縄県選抜

沖縄県は自分たちのペースにもっていけなかったのが惜しまれた。

香川県選抜―愛知県選抜

愛知県は栗山を中心に連続14得点をあげて香川県に隙を与えなかった。

北海道選抜―富山県選抜

過去の優勝チーム同士の対決。接戦が予想されたが富山県は前回ほどの攻撃力がなかった。しかしGK森が踏ん張り、なかなかの好ゲームを展開。

山口県選抜―大阪府選抜

前半は競り合ったが、後半になると山口県がスパートをかけて飛び出した。

▼準決勝

奈良県選抜―愛知県選抜

愛知県はエース古川が打てば入るといった働きを見せたが、一人に頼りすぎた。

■最優秀選手

男子　CP　前田　誠一（北海道選抜・室蘭市立本室蘭中学校3年）
女子　CP　上村　典子（山口選抜・徳山市立住吉中学校3年）

■オリンピック有望選手

男子　CP　前田　誠一（北海道選抜・室蘭市立本室蘭中学校3年）
　　　GK　森　雅之（富山選抜・氷見市立西條中学校3年）
女子　CP　上村　典子（山口選抜・徳山市立住吉中学校3年）

■ベスト7

男子　CP　浜田　尚（北海道選抜・函館市立凌雲中学校3年）
　　　CP　筆吉　亮介（北海道選抜・函館市立凌雲中学校3年）
　　　GK　森　雅之（富山選抜・氷見市立西條中学校3年）
　　　CP　古川　眞司（愛知選抜・名古屋市立天神山中学校3年）
　　　CP　吉広　優（奈良選抜・平群町立平群中学校3年）
　　　CP　本谷　洋海（奈良選抜・平群町立平群中学校3年）
　　　CP　永本　亙治（山口選抜・岩国市立平田中学校3年）
女子　CP　土屋　友美（山形選抜・尾花沢市立中学校2年）
　　　CP　釣　奈美子（富山選抜・氷見市立小杉中学校3年）
　　　CP　早船　愛子（富山選抜・氷見市立氷見南部中学校3年）
　　　CP　宮本奈津美（大阪選抜・堺市立大浜中学校2年）
　　　CP　中島　賀子（山口選抜・徳山市立住吉中学校3年）
　　　CP　仲座　由美（沖縄選抜・東風平町立東風平中学校3年）
　　　GK　稲福亜津沙（沖縄選抜・東風平町立東風平中学校3年）

北海道選抜ー山口県選抜

北海道の完成された攻守に対して、山口県は絶対的なエースがほしかった。

▼決勝

奈良県選抜ー北海道選抜

開会式に現われたときから自信を持っているといった印象を与えた北海道。それに対して小柄（167cm）ながら闘志あふれるプレーでゴールを守る笠井を中心に本谷、吉広のシュートで点を稼ぐ奈良県。

その笠井の好守で北海道にペースをつかませず、奈良県が先手をとりながら試合が進んで行ったが北海道は少しもあわてない。本谷が2分間退場になったところをみはからうかのようにスパートをかけ、2度目の優勝を飾った。

優勝した北海道の小林監督は、11月から土日を使ってコンビを主体に、生活面を含めてチームワークの徹底を図ることをポイントに置き、具体的には富山県に勝つことを目標にして、練習試合はほとんど行わず、最後に3試合、青森県などと行ったと、喜びのなかにもすっかりチームを掌握し、淡々と語ってくれた。

■女子

▼1回戦

山形県選抜ー奈良県選抜

2、3年生の奈良県だったが、調整不足だったのが惜しまれた。

香川県選抜ー神奈川県選抜

学年の差（香川県は2年、神奈川県は3年）が出たようなゲームだった。

▼2回戦

矢田中学ー山形県選抜

山形県は加藤、土屋を主にパワーのあるチーム。矢田中学は今までの経験を上手く生かし切れなかった。

北海道選抜ー山口県選抜

北海道は初勝利は次回以降になってしまったが、これまでの経験がきっと生かされるに違いない。

富山県選抜ー沖縄県選抜

スピードでは随一を誇る沖縄県。富山県の早船を中心とした力強い攻撃は一歩及ばなかった。

神奈川県選抜ー大阪府選抜

大阪府は宮本を中心にした力強い攻撃でリズムをつかんだ。

▼準決勝

山形県選抜ー山口県選抜

山形県は相手の1ー5ディフェンスに対し無理なシュートが多く、過去2戦のような元気が見られなかった。

沖縄県選抜ー大阪府選抜

沖縄県は最初からスピードあふれる攻守で一気にスパートをかけた。

▼決勝

山口県選抜ー沖縄県選抜

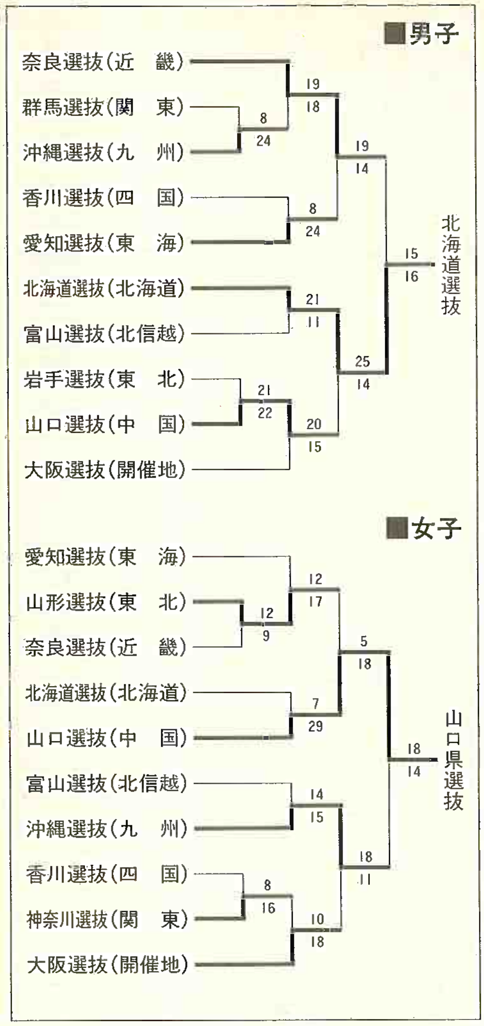
前半は山口県の松村がチーム内で連続7点を上げる大殊勲。試合は前半、7度同点になる接戦。しかし後半、沖縄県は得意のスピード攻撃が不発に終わり15分間無得点は痛かった。

優勝した山口県の吉岡監督は、10月から土日を使って岩国商などと練習試合を行い、とにかくチームカラーを出せるようにまとめ上げようとした。そして具体的には、とにかく1回戦に勝つことを目標にしてきたという。1回戦に勝ったことでリズムに乗れたことが大きいと嬉し泣きの選手たちの傍らで大満足に語ってくれた。

年々この大会も活況を帯び、未来の「オリンピック有望選手」に向けて、見ている者もわくわくするような素晴らしい大会を持続してくれることを期待したいと思う。

最後に、この大会のために御尽力いただきました関係各位に対し、深く感謝致します。

臼井　鉄久



第3回JOC ジュニアオリンピックカップ

男子有望選手選考にあたって

男子選考委員　奥田　新治

第3回JOジュニアオリンピックカップが12月25日、26日の両日、大阪府堺市大浜体育館、金岡公園体育館で各ブロック大会を勝ち上がってきた男女各10チームの選手達が参加して行われた。

この大会の目的は、ジュニア競技大会の資質向上を図ると同時に優秀なジュニア選手表彰制度を設け、将来はオリンピック大会や世界選手権大会等において活躍する選手の表彰と認定を行う一環としての強化事業である。

この大会で、最優秀選手、優秀選手、有望選手の選出と大変重要な役を賜り、責任を感じました。

大会の前日、選考委員の皆様方と選考基準等の会議を行い、選考に対する意見の交換を行った。今大会は、12月の開催とあって3年生も多く参加していたが、現時点で出来上がった選手ではなく、運動能力に優れ多少身長が劣っていても、ハンドボールセンスに優れた選手を選ぶことで一致した。

各チームの監督より推薦調書を準備して頂き、参考にしてゲームを幅広く観戦することが出来た。

全体の感想では、ボールを持ってからのプレーが多く、必然的に個人プレーが多かった様に思えた。チームとしてのフォーメーションプレーは多少あったが、2人3人のコンビプレーが少ない様に思えた。中学生くらいのレベルでは2人3人のコンビプレーで点が取れればハンドボールの幅が広くなるだろうし、またハンドボールが面白くなって行くのではないかと感じた。今大会は、松ヤニ、粘着スプレーの使用が禁止されていたために、両面テープでプレーしていたためか、パスミス、キャッチミス、シュートミスが多く出ていた様に感じた。これくらいの年齢から松ヤニを使用してハンドボールの基本であるパス、キャッチの練習を行えばボールを自由に操作出来、またボールを持っての空中ボディーコントロールもよくなって行くはずである。

男子の最優秀選手に選ばれた前田誠一は182cmの長身で、左利きであり、特長としては豊かなジャンプ力と左から放たれる肘とリストの効いたジャンプシュートであり、空中のバランスもよく、今大会No.1プレイヤーであったと思います。課題としては、横の動きとサイドを活かすプレー、運動量を多くすれば近い将来ジュニアナショナルの選手として活躍出来るだろうし、ナショナル選手も夢ではないと思います。

この大会で、巣立って行った選手たちが、近い将来ナショナルチームの一員として活躍してくれることを期待しています。

最後になりましたが、本大会が益々の発展と発掘、育成にご尽力下さいます様お願い申し上げます。

女子最優秀選手、有望候補選手選考について

強化委員　樫塚　正一

第3回JOCジュニアオリンピックカップを振り返ると、次の様な展開が見えてきました。大会を重ねる度に各選手の身長は大きく、体格は逞しく変化をしていることが伺えた。中学指導者の取り組む姿勢と熱意が、中学生に関心を持たせ、ハンドボール競技を選択する選手の質が変化して来たものと考えられます。この様な環境の中で、2日間に於ける大会に参加したチーム全体のレベルは高く、毎試合が白熱した展開でした。競技スタイルは攻撃のセット攻撃はセンタースリー攻撃であり、防御は0：6防御、1：5防御の半々であった。速攻の展開方法は縦攻撃の方法を使って攻める戦法が中心で、1チームだけがクロース速攻を戦法として使っていました。

各チーム共、指導者の指導理念がチームカラーとして生かされ、戦術や戦法に特徴があったことは楽しい攻撃や防御の観戦になった。

攻防共にポジション別の役割がよく理解されていて、その役割に忠実にプレーを行っていること、またチーム・ポジションのバランスがよく取れていることにも感心しました。この状況の中で最優秀選手に選ばれた山口選抜の上村典子君は、身長165cmのアタッカー選手です。攻防のバランスが非常に良いこと、特に攻撃の技術は素晴らしい。165cmの身長を生かしたシュートに入るステップとタイミングの良さは、中学生かと疑うほど。状況判断も含めた技術の上手さを持っている。中学生としては大きい身体の持ち主にもかかわらず、身体の使い方、動かし方は軽く、行動範囲は早く広い。

状況判断に加え、攻撃範囲の広さやタイミングの良さは、プレイヤーとして完成されていると言っても過言ではありません。

最優秀選手に選ばれた上村典子君の他に、優秀選手に選ばれた7名の選手がおります。上村君に劣らず将来有望な選手でした。選ばれた7名の選手は、各チームの攻撃・防御の中心選手として貢献していました。富山選抜の両アタッカー、右の釣君、左の早船君の左右コンビは素晴らしい展開力を見せていました。2回戦で沖縄選抜に敗れて上位には進めなかったが、個人技術は素晴らしい質を持っていました。沖縄選抜の仲座君は150cm台の身長でありながらセンタープレイヤーとしての動き、視野の広さ、

パステクニックは素晴らしく驚かされました。沖縄選抜には、もう一人GKの稲福君のキーピング技術も素晴らしい技術でした。また大阪選抜の宮本君はアタッカーとしては小さい159cmの身長でありながら、シュートに入るタイミングの取り方とコースの選択の上手さで活躍していました。山形選抜の土屋君も、山口の上村君と同様、167cmから繰り出されるシュートは素晴らしいテクニックを持っていました。

選ばれた8名の選手は、いずれも将来的に非常に有望で期待が持てる選手であり、進学して一層技術を磨いてほしいと願う次第です。

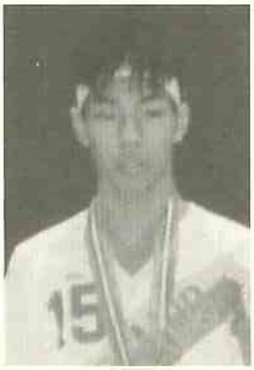
試合を観戦して思うことは、指導された先生の熱心な指導によってチームは完成された技術を持って試合に臨んでおり、そのレベルは高いものであった。試合の中で意図的なラフプレーも見えず、取り組む姿勢も態度にも清々しい気持ちでプレーを続ける選手を眼で追うことが出来たことを指導者と選手の皆様に感謝したいと思っています。

前田選手が最優秀選手に選ばれて

室蘭市立本室蘭中学校　笹森　満明

北海道のハンドボールは、40数年の歴史を持っている。その中で中学校球界の現状は、既存の部活に押され、新興のハンドボール部を創設するとなると多くの問題を抱えている。

生徒数の減少、練習場所の確保や経費等の制約も含め周囲の理解を得るのが大変である。まして、冬期間は雪が降るためグランドが使えずキャッチボールすらままならない。本市においても、指導者数の問題もあるがハンドボール部があるのは中学校では本校のみである。かつては、高校には優れた指導者を輩出し勢いを競った時代があったが、それも遠い過去の話である。本校のハンドボール部も創設当初、近くの公園を借りてゴールポストもなく、ボールも譲り受けたものを使用したゼロからの出発であった。しかし、こうした厳しい条件をクリアし7年目を迎えた。



前田誠一選手

私が、前田誠一と出会ったのは3年前であるが、彼を見た瞬間心に感じるものがあった。中学校1年生にして、身長は175cmあり、サウスポーから打ち下ろすシュートの速さは目を見張るものがあった。やがて、北海道を代表する選手になることは、容易に想像がついたが、全国大会で最優秀選手に選出されたり、オリンピック有望選手の指定を受けるとは考えもしなかったのが正直なところである。

前述したが、室蘭市においてこうした逸材を育てるとなると、その環境が問題である。衆知のように北海道は広い。一日200キロ以上、練習試合に車で走ることはざらである。少数ではあるが、情熱を持った指導者が点と点を結ぶ地域におり、みんなで育てようとしてくれる。これからも着実に一歩一歩ハンドボールの裾野を広げるために先進地域の実情を学んだり、多くの先輩諸氏の助言を仰ぎ、第二、第三の前田誠一を育成するために努力をしていきたい。

最優秀選手に選ばれて

徳山市立住吉中学校　上村　典子

名前を呼ばれた時、「エッ?」と一瞬頭の中が真っ白になりました。あまりにも信じられなくて…。三度目の正直で、やっと念願の優勝ができて、その上、最優秀選手にまで選ばれたことが、今だに信じられません。

今まで私たちは二度、全国大会に挑戦しました。でも、全国の大舞台は、あまりにも大きすぎました。私たちは自分たちでも気付かないうちに緊張していました。私たちの力が及ばなくて負けたのなら、あきらめもつくけど、緊張という見えない敵に負けて、自分たちの力を出し切れずに終わったことが、すごく悔しくて、情けなくて、本当に心から涙が出ました。

二回もそんな悔しい思いをしても、今もなお、こうしてハンドボールを続けてこれたのは、やはり3年間同じ苦しみや悲しみ、そして勝利の喜びを一緒に味わってきた「仲間」のおかげです。毎日の練習の中で、PLAYについていろいろと話し合っているうちにケンカになってしまったり、試合中、厳しい事を言ったり、言われたりすることができる「仲間」がいたから、悔しさを乗り越えることができたのだと思います。

今大会で優勝することができたのは、もちろん、監督の吉岡先生や、多くの先輩や、後輩のおかげだけど、一番の決め手となったのは、何といっても仲間たちの存在です。その中には、選抜チームを組むことになってから仲良くなることができた新しい仲間もいます。



上村典子選手

これまでいろいろと貴重な経験をしてきました。経験なら、誰にも負けない自信があります。でも、それは私だけの力ではありません。この経験を陰で支え、応援してくれたたくさんの人たちがいます。今はそういったすべての人たちにすごく感謝しています。

これからもハンドボールを続け、「最優秀選手」という名につぶされないよう、そして、今よりももっとふさわしい選手になれるように、がんばりたいと思います。

第46回全日本総合選手権大会報告

男子大同特殊鋼、女子オムロンが優勝



7回目の優勝をした大同特殊鋼

昨年暮れの12月8日から11日までの4日間、東京体育館と駒沢体育館の2会場で第46回全日本総合ハンドボール選手権大会が開催された。

本年度は10月に広島でアジア大会が開催されたためか、大会の主役となる日本リーグ勢にとっては下半期に大会が集中し、コンディション調整が難しく、それをたくみに利用したチームが勝ち進むのではないかと予想された。

また、学生陣が日本リーグチームに対してどういった戦いを見せるかが大会の妙味の一つに挙げられるが、今回はインカレ優勝の男子・日本体育大学が緒戦に日本電装を相手に打ち合いの末勝ち進んだものの、男子大阪経済大学と大阪体育大学は日本リーグ前期を1、2位で折返した大同特殊鋼と中村荷役に大量点を浴びた。一方、女子は東京体育大学、筑波大学、日本体育大学の3校とも日本リーグ勢に最後まで食い下がったが惜しくも敗れた。

●男子／大同特殊鋼優勝までの足跡

《1回戦》

▽大同特殊鋼ー大阪経済大学

前回、15年ぶりの優勝を果たし、秋のわかしゃち国体でも14年ぶりの優勝。そして今大会直前まで開催されていた日本リーグ前期でも首位折返しと、今まさに〝乗っている〟大同特殊鋼に対し、実に22年ぶりの出場となった大阪経済大学。スピードとパワーで勝る大同特殊鋼が試合開始からハイペースで進め、大量43点を奪った。対する大阪経済大学は3年生以下の若いメンバーで頑張ったが、力の差は大きかった。

▽日本電装ー日本体育大学

茅場、佐々木の両フローターを主体にスピードあふれる攻守の日本体育大学が、ハイスコアのゲームをものにした。日本電装もこのところ上昇気流だっただけに悔しい一戦。

▽大崎電気ー京都教員ク

長年教職員界をリードしてきた京都教員クも序盤は競り合っていたが、次第に体力差が見え、大崎電気にゲームを握られた。

▽トヨタ車体ー日新製鋼

日本リーグ2部を安定感ある戦いで折返したトヨタ車体。日新製鋼にどのように挑むかが注目されたが、前半の失点が大きく、後半必死の追い上げも実らなかった。

▽本田技研ー大同ク

歴戦の名選手を揃え、毎回スリリングな戦いを見せる大同クもGK橋本を主体に堅守の本田技研相手とあってはなかなかゴールを割ることができなかった。

▽中村荷役ー大阪体育大学

惜しくもインカレ3連覇を逃がしたが、今年度の学生界では一番の充実をみせた大阪体育大学が、アジア大会金メダルメンバーの趙を加入させ、さらなる攻撃力アップを図った中村荷役に挑んだ一戦も両チーム打ち合いの末、中村荷役が余裕の勝利。

▽香川教員ー三陽商会

教職員大会3連覇を果たし、4回連続出場の香川教員は堂々と戦ったが、日本リーグ1部の壁は厚かった。がしかし、後半10分過ぎまでの攻防は見応えがあった。

▽トヨタ自動車ー湧永製薬

全日本の三輪を中心に〝高さ〟では遜色のないトヨタ自動車。終始けれん味のない戦いを見せたが、対する湧永製薬の再三の2分間退場をうまく生かしきれなかったのが惜しまれる。

《2回戦》

▽大同特殊鋼ー日本体育大学

今大会ではこのところ日本リーグ2部相手には勝利を収めている日本体育大学もさすがに1部、しかも大同特殊鋼とあっては試合開始15分近くまでのノーゴールが最後までひびいた。

▽大崎電気ー日新製鋼

1ケ月程前の日本リーグではロースコアの争いで大崎電気が接戦をものにしたが、大崎電気はその試合で自信をつけたかのようにGK工藤が頑張り、再び接戦を制した。

▽本田技研ー中村荷役

試合展開とは別に本田技研・橋本、中村荷役・井上両全日本GKの争いに妙味がもたれた一戦。さらには中村荷役・趙を交えた戦いは見応え十分だったが、趙の再三のゴールもあり、中村ディフェンスは読みがよく、本田技研にペースを与えなかった。

▽三陽商会ー湧永製薬

新人GK荒木が好守をみせる。三陽商会は前半、大いに頑張ったが、後半に入ると湧永製薬は相手ディフェンスに退場が重なったところをつき一気にペースをつかんだ。

《準決勝》

▽大同特殊鋼ー大崎電気

大崎電気のGK佐藤、工藤とも

よく頑張り、前半は両チームともゆっくりしたペースだったが、大同特殊鋼は後半に入ると一気にスパートをかけそのまま制した。が、勝利を収めたとはいえ大同特殊鋼も再三の退場があり、そこをつかれていれば試合の展開はどうなっていたかわからない。

▽**中村荷役—湧永製薬**

試合巧者の湧永製薬は中村荷役にペースを与えないところはさすが。後半に入ると中村荷役GK井上の好守や湧永製薬にチグハグさが目立つようになると中村荷役は一気にスパート。出場13回目にして初の決勝進出となった。

《**決勝**》

▽**大同特殊鋼—中村荷役**

決勝に残ったのは日本リーグ前期を1・2位で折返した大同特殊鋼と中村荷役。開始早々はローペースで試合が進む。その後、大同特殊鋼が7連取と一気に突っ走るのかと思わせたが、中村荷役もじっくり立て直し、結局前半は12—12と、勝負の行方はまったく分からなくなってきた。

後半になると中村荷役ペースで時が刻まれるが、大同特殊鋼も末岡や林（珍）などのシュートで22—22と再び同点に追いつく。残り1分をきって25—25。最後は大同特殊鋼、監督兼任の高村に絶妙なパスが通り、ゴール！ 劇的な幕切れは2年連続7回目の優勝となった。



優勝を飾ったオムロン

●女子／オムロン優勝までの足跡

《**1回戦**》

▽**JUKI—東京体育大学**

インカレの女王・東京体育大学も山田、児島らの活躍で必死に食い下がるが、前半のロースコアが最後まで尾をひいてしまった。

▽**シャトレーゼ—筑波大学**

キャプテン大前を中心に稲次らの鋭い攻撃でしかける筑波大学。常に先手を取られながらも最後まで僅差だったが今一歩及ばなかった。

▽**大和銀行—ジャスコ**

大和銀行はアジア大会でチーム一の得点を稼ぎ、前期日本リーグでもトップとすっかり自信をつけた田中の活躍が大きく、終始危なげなかった。

▽**日立栃木—日本体育大学**

日本体育大学も前半はよく日立栃木についていったが、後半11分から8分近くノーゴールが痛かった。

▽**大崎電気—小松ク**

力関係からいっても大崎電気絶対有利のカード。対する小松クも対筑波大学で活躍した和田などを中心に精一杯の戦いに挑んだ。

▽**ブラザー工業—神奈川教員**

今大会唯一の初出場チームの神奈川教員はブラザー工業相手に大差はつけられたが日本体育大学などで実績のある児玉らが最後まで必死に戦った。

《**2回戦**》

▽**オムロン—JUKI**

体格で劣るJUKIは高塚らのスピードある攻撃で敗れはしたが〝明日〟につながる戦いをした。

▽**シャトレーゼ—大和銀行**

日本リーグは最後まで接戦を演じただけに興味が持たれた。が、後半、シャトレーゼは二度にわたる連続得点で大和銀行を押し切った。

▽**日立栃木—大崎電気**

前半、白、朴の活躍で一気にダッシュした大崎電気だが、後半必死になって追い上げる日立栃木の中山などの攻撃は見応えがあった。それだけに日立栃木にとっては悔しい一戦。

▽**ブラザー工業—北国銀行**

昨年の準決勝でも対戦し、雪辱を果たしたいブラザー工業。アジア大会でも活躍した期待の若手・山川を中心に乱打戦に挑んだが、惜しくも敗れた。

《**準決勝**》

▽**オムロン—シャトレーゼ**

前半はGK王が7MTを連続してセーブするなどの堅い守りでシャトレーゼの攻撃を防いだ。

▽**大崎電気—北国銀行**

抜群の得点力を持つ大崎電気に対し、前半は10分過ぎまで互角の内容だったが、徐々に北国銀行がペースをつかむ。後半10分過ぎになってようやく攻守がかみあった大崎電気が必死に追い上げるが、それまでの〝貯金〟が大きく2年連続しての決勝進出となった。

《**決勝**》

▽**オムロン—北国銀行**

後半12分過ぎまで常に点差は2点以内という接戦。だが前日まで守り中心だった張がポストでの得点を重ねたオムロンが次第に突き放していった。オムロンは高い得点力はないものの、3試合とも失点を20点以内に抑えた堅いディフェンスが勝因だった。

なお、今大会の最優秀選手は男子は大同特殊鋼・林（康）、女子はオムロン・古田が選ばれた。

最後に、今大会に御尽力していただいた関係各位に深く感謝致します。

（臼井鉄久）

第2回近畿ジュニア選抜韓国遠征報告

韓国遠征を終えて

男子監督（京都府東山高校）　堀田　靖人

今回は、当初の予定よりゲーム数が多くなり、意図していた練習内容の研修面が少々不満足感の残るものであった。

「近畿地区の高校生のレベルアップ」を図る目的で企画した第1回の成果が大きく、チームとしてでなく選手個々の意識アップと練習方法のチェックを目的とするため、「チームづくり」はされていない格好で、現地での選手起用により、最終的にはポジションにおける各選手の能力を引き上げるという効果では、今回とは異なった思いである。対戦校も韓国体育大学、大光高校の2校となり、ゲームの勝敗が中心。ゲーム回数も多く、相手の俊敏なフットワークと正確なパスワークに驚かされる中、ミスを多発するというチーム状況に困惑したことは事実です。

戦績としては、満足な結果が残せなかったが、ウォームアップを一緒にやり、フットワークの指導を受ける中、選手たちの中には相手方と同様のフットワークがこなせる選手も多く、昨年実施後、各府県、各学校において取り入れられている韓国式トレーニング方法が十分に成果が発揮されている確認も出来たのではと自負している次第である。

また、今回、指導を受けた韓国体育大学女子監督の鄭氏、女子コーチ金氏が共にゴールキーパー出身ということで、多種にわたり練習方法等を直接指導を受けたことが、最大の成果となったのではないだろうか。

韓国遠征に参加して

女子監督（那賀高校）　田中　洋光

平成6年12月25日より29日の5日間、韓国のソウル市の中・高・大学生との交流を行った。近畿選抜チーム男女40名の選手と指導者15名の一行が、新しく開港した関西新空港から金浦空港に飛び立った。ガイドの説明によると、気温は日本と同程度で、例年より暖かいとの説明であった。

今回の遠征の目的は、近畿選抜チーム全体のレベルアップ。指導者の更なる飛躍にと期待を持って参加した。

私は特に前回の遠征と違って、女子チーム監督という責任ある立場で参加し、多少肩の荷が重い感じがした。というのは、出発前より20名の選手たちを、どの様に使い、戦うか、昨年度の試合内容が脳裏に浮かんできたからである。

25日、金浦空港到着後、ホテルで過ごしゲームのための戦略を練って、いかに勝利するか考えた。

26日には、朝食をとり、9時にホテルを出発。試合相手である貞信女子高校に向かった。バスで約30分程度のところにあり、100年の伝統と歴史を誇る女子高校に案内された。朴泰遠コーチからスケジュールを説明された後、トレーニング及びゲームを午前・午後に分けて行った。午前中、合同練習は朴コーチ指導のもと、体力づくり、フットワーク、パスワークと多種にわたる練習方法を展開してくれた。特に日本選手は「走・跳・投」の基礎体力不足など韓国選手との差が目立った。選手は元より、私たち指導者にも有意義であった。トレーニング終了後、11時よりゲームが開始された。体格にはあまり差がなく、選抜チーム側にも期待が持たれた。試合開始直後より貞信女子のスピーディーな攻撃と選抜チーム側のミスの連続で前半から圧倒され、終了してみると33−10の完敗であった。実力の差をまざまざと見せつけられた感じであった。

私たちに多くの反省と課題を与えてくれた。特にゲームには常に意欲を集中し、その場に於て瞬時にプレーに対応できる能力が必要である。ゲームのためには、常にコンピューターのごとく動くディフェンスが大切であることがヒシヒシと感じられた。

午後には貞信女子中学生との対戦。25−19とある程度の成果が発揮されたが、勝負時のチャンスを自分たちに引き寄せるプレーを研究して行かなければならない。

27日は前日同様、貞信女子高校とトレーニング後に再度対戦である。昨日の反省を基に、選手にチェックポイントを告げ、貞信女子高校との最後のチャンスとばかりゲームはスタートしたが、相手は昨日以上に攻守共に気合いが入っていた。選抜チーム側の内容も、大差ながら頑張っていた様に思う。結果は27−7であった。

昼食後は男女共韓国体育大学女子チームとの対戦。オリンピック候補選手を2、3人抱えるチームであった。ゲームが開始されると、これが女子選手かと目を疑う思いがした。高校生と大学生という点を割り引いても、全てに優れたチームであった。

翌日28日は、昨年度対戦した昌文女子高校を訪れた。バスで約1時間位の高台に位置する歴史の古い学校です。到着後、コーチよりスケジュールが発表され、午前中1試合と午後15分ゲームを3試合行うとの説明。早々にアップを開始した。試合前の貞信女子高校選手のシュート練習を見ると、今日はチャンスと思った。近畿選抜側もベストメンバーで試合に臨んだ。

いざゲームがスタートすると、貞信女子高校が先行し、近畿選抜が追いつくという今までと違う粘りが出てきた。前半は12−5で貞信女子がリード。ハーフタイムでは選手を励まし、後半に頑張る様に指示した。その後半は一進一退の白熱した内容で、残り5分では同点まで追いついたものの、勝負時のチャンスにミスの連続で、結局は18−16で敗れた。しかし、今回のゲームでは、全選手に自分たちのペースでゲームをすれば勝機があることが分かった。

昼食後も3試合を行い敗れたものの、選手たちは一生懸命努力すれば自分たちの力でも通用することが分かり、希望を持つことができた。

今回の遠征で、選手、コーチ、監督の方々が多くのことを学び、各チームにこの遠征の意義が広がることと思います。今後も地道に努力し、近畿選抜チームの一員がオリンピックで韓国を破ることを期待し、さらに邁進したく思います。

自分の課題を見つけた

桃山学院高校2年　石田　祐樹

この遠征に参加して、僕自身たいへんよかったと思っています。国内にいてはできないいろんなよい体験をさせてもらった。でもこの遠征に参加できたのも選考会で選ばれたからで、選考されなかった人の分まで頑張らなければならなかったと思う。

この選抜チームは意外にみんな仲がよくて、韓国に着いても和気あいあいとしていて明るかったので試合も大丈夫だと思っていました。ところが3日目、相手は韓国体育大学男女で、女子との試合も勝っていた試合を負けてしまい悔いが残った。この時、キャプテンとしてどうするべきだったのかと思うと、まず相手に勝とうという気持ち、ミスが多くなり、ディフェンスができなくなったときのチームの意志統一などを僕がきちんとやっていれば勝てていたと思う。

男子とも試合をやったが、力の差があまりにも違いすぎて、自分自身どうしていいのか分からず、元気がないまま試合が終ってしまった。正確さが違う、サイドやロングシュートの正確さが特にすごい、ロングシュートは一歩で打ってきて、無駄な足は絶対にふまない。

最終日の大光高校との試合は、午前はまあまあだったが、午後の試合はいままでで最悪だった。同じ高校生であんなにも力の差があるとは、はっきりいってやる気をなくすくらいだった。キャプテンとしても悪い締めくくりだった。自分の頭が全然働かなくて、チームをどうまとめるかなど、そこまで手がまわらなかった。ああいう時こそ、みんなの心を一つにまとめ、元気を出していくかが今後の僕の課題だと思います。

今回の遠征で、一番学んだことは、技術面もいろいろ学んだけど、メンタルな面が一番大きいと思う。

多くのことを学んだ韓国遠征

夙川学院高校3年　三安　由香

最初、韓国のチームのすごさにすごく圧倒されました。フットワークにしてもシュート一つにしても、すべてが正確であること、パスキャッチのミスの少なさ、シュート一つにしてもとても迫力があり、自分がちゃんとできるか不安でいっぱいでした。

一日目の貞信女子高校では、まず驚いたのはフットワークの多さです。そしてそれをどれだけ正確に早くやれるかです。やっている間に体が痛くなりました。それは自分たちが正確なフットワークをしていなかったからだと思います。韓国の人たちの体力、パワー、スピードは、日本人とは大きな差があると思いました。

二日目の午後からの大学生との試合では、韓国の高校生よりもっともっとパワー、スピードがあり、自分たちは目が点になりました。打つとシュートは全部決まるし、ディフェンスの当たりといい、すごくその迫力に圧倒されてしまいました。自分が上から打つシュートは全部カットされるし、フェイントもなかなかぬけませんでした。最後のトレーニングは、しんどかったけれど楽しくできました。

三日目の昌文女子高校との試合は、チーム全体も盛り上がっていてすごくいい試合をしたと思います。前半の立ち上がりが悪く、なかなか点を取れなかったけれど、後半がすごく動き、よくなって何回か逆転した時もあったけれど惜しくも負けてしまいました。

私はみんながいたからこそ、このチームのキャプテンができたんだと思うし、たった一人の力じゃないと思いました。みんなに感謝の気持ちでいっぱいです。このことを誇りに思って、これからまた自分のチームに戻った時に、この経験を生かしてがんばっていきたいと思います。

そしてこの遠征でたくさんのことを教えてくれた仲間たちとの想い出を大切にしていきたいと思います。

試合結果

■男子

12月26日
近畿ジュニア14－10韓国体育大学(女子)＊
近畿ジュニア10－18韓国体育大学(女子)
近畿ジュニア17－38韓国体育大学(男子)

12月27日
近畿ジュニア18－36韓国体育大学(男子)
近畿ジュニア 3 －20韓国体育大学(女子)

12月28日
近畿ジュニア23－22大光高校
近畿ジュニア13－22大光高校

■女子

12月26日
近畿ジュニア10－33貞信女子高校
近畿ジュニア19－25貞信中学校

12月27日
近畿ジュニア 7 －27貞信女子高校
近畿ジュニア 3 －17韓国体育大学(女子)

12月28日
近畿ジュニア16－18昌文女子高校
近畿ジュニア19－22昌文女子高校

＊＝前半のみの試合

SRA-96エリート・レフェリー・コースに参加して



後藤　登
★
清水宣雄

平成6年12月13日から18日の日程で、ポルトガルの古都ポルト市で行われたSRA―96エリート・レフェリー・コースの参加報告をさせていただきます。

はじめに、SRA―96とは、ドイツ語・英語・フランス語の審判員の頭文字を並べたものであり、96とはもちろんアトランタ・オリンピックを意味しています。IHFのPRC（審判競技規則委員会）はアトランタ・オリンピックを最終目標に、現在30ペアをエリート・レフェリーとして選抜しており、エリート・レフェリー・コースによって、各ペアの試験を行い、オリンピックまでの世界選手権等のノミネートを行います。したがって、96年次に50才を超えるレフェリーは当然ノミネートから外され、各ペアが真のトップ・レフェリーとなるべくしのぎを削っています。

今回は、エリート・レフェリー・コースのために国際大会が開催され、ポルトガルA／B、ベルギー、ベルルーシ、ルクセンブルクの各ナショナルチームが参加しました。大会では新しいルールが試され、1チーム14名、20分3ピリオドでゲームが行われました。各ピリオド、0―0から始まり、勝ち点2が与えられるという方式は、各ピリオドごとに勝負の分かれ目が存在し、最終ピリオドまで緊張感が続く試合が行われました。コースには、PRC委員長のエイリアス氏、副委員長のボルスタット氏、キルホーン氏、グリンベルガス氏、ヨーロッパ担当のハックル氏、アフリカ担当のゾルゲ氏の6名が揃い、緊張の中にもユーモアがあふれた講習となりました。参加者は日本、モロッコ、ギリシャ、イタリア、スペイン、ポルトガルの6ペアであり、スペイン・ペアの一人はバルセロナ・オリンピック参加レフェリーでした。

初日は、エイリアス氏の基調講演に始まり、体力テストが行われました。今回の体力テストは、オランダから来たPRCのドクターが担当し、従来のクーパーテストに代わって徐々にペースが早くなるテープの音に合わせて、オールアウトまで20mを往復するというテストが行われました。この間、胸につけたセンサーで心拍吸数を測定し、走った直後に血液検査まで行いました。お蔭様で、二人とも各年代の標準を上回る体力があるという結果が出ました。

二日目からは、まだ暗い9時から12時過ぎまで練習を行い、昼食後ホテルから体育館に移動、3時、5時、7時と3試合を消化し、ホテルに戻って9時半から夕食という日程が毎日繰り返されました。

私たちのペアは大会二日目のポルトガルB対ルクセンブルク、四日目のポルトガルB対ベルルーシ、そして最終日のベルルーシ対ルクセンブルクの3試合を担当しました。

PRCのメンバー6名に一度にチェックを受けるという、初めての体験の中で吹いた一試合目は、緊張の余り集中に欠けたものになってしまいました。コンビネーションがアンバランスになり、視野も狭く、ビッグ・ファールを見逃すという失敗もしてしまいました。ボルスタット氏から二人の共同作業の重要性についてアドバイスを受け、気持ちを新たにして臨んだ二試合、三試合目は、ほぼ思い通りの笛が吹け、自分たちで満足できるものでした。PRCの評価も、国際審判員としてのレベルをクリアし、他のヨーロッパのペアに劣らぬポイントを上げることが出来ました。



詳しい講習の内容については、協会審判部から後日発行されるレフェリー・ハンドブックに報告したいと思います。

最後に、私達にこのようなチャンスを与えて下さったPRCのメンバー、日本協会の皆様、国際審判員の諸先輩方に心から感謝し、報告とさせていただきます。

連載14

ハンドボールの指導法

指導委員会委員長　大西　武三

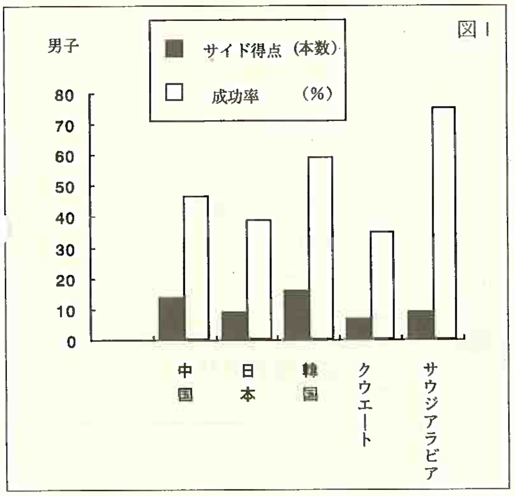
右サイドのシュートテクニック

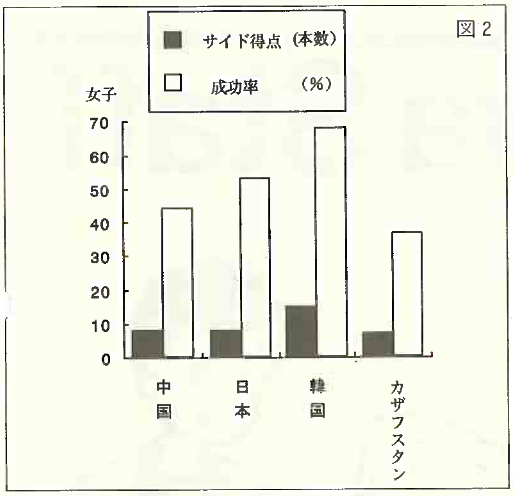
技術・戦術は時代とともに変化し進歩していく。それを可能にするものは、指導者やプレイヤーの創意工夫である。またルールの改正も原因の一翼を担っていることは確かである。ボールテクニックに関しては、片手のボール操作が通常化したことも大きな要因である。この片手操作は、形態的に大型化してきたこともあるが、ボールが変形せず規格ぎりぎりまで小型化したことやマツヤニや両面テープの使用によるところが大きい。よく昔に比べてハンドボールの進歩が話題となることがある。「昔の方がもっとすごかったよな」「今の方が確かにテクニックは上がっている」、「テクニックは多彩だが小手先のものが多い」とかいろいろのことが言われる。長い間、ハンドボールを見つめてきた私にとって言えることは、確実にゲームのテンポは早くなっているし、テクニックはバリエーションが豊かになっていることである。

今回は右サイドのシュートテクニックを取り上げるが、サイドシュートも年々その技術が向上し、「サイドで打たせればよい」式の戦術では到底対処できないくらいテクニックは質量とも向上し、その成功率は上がってきている。

サイドシュートの戦術的意味

厚みと幅をもって攻撃することは、攻撃の基本的要素である。ディフェンスを横に広げ、縦に広げることはディフェンスの守るゾーンを広げることができる。ディフェンスは孤立化し、コンビで守る状態を崩される。幅と厚みのある攻撃は、ロングシュートとサイドシュートの技術的能力によって実現される。より遠い位置から、より角度のない位置からシュートを入れることが、ディフェンスのシステムを破壊させる可能性に繋がるものである。それらの能力がなければ、ディフェンスはシュート確率の高い、中央ゴールエリアラ





男子	総得点	ポスト	サイド	フィールド	カットイン	速攻	フリースロー	7m
中国	78	12.8	17.9	29.5	14.1	20.5	1.3	6.4
日本	81	12.3	11.1	28.4	12.3	17.3	4.9	13.6
韓国	106	5.7	15.1	37.7	6.6	24.5	0.9	9.4
クウェート	82	13.4	8.5	31.7	11.0	24.4	0.0	11.0
サウジアラビア	76	19.7	11.8	18.4	13.2	23.7	1.3	11.8
女子								
中国	77	13.0	10.4	32.5	15.6	24.7	1.3	2.6
日本	73	15.1	11.0	24.7	16.4	24.7	0.0	8.2
韓国	116	12.9	12.9	18.1	13.8	32.8	0.9	8.6
カザフスタン	67	31.3	10.4	13.4	13.4	6.0	0.0	25.4

表1　アジア大会のサイドシュートの割合

インを中心として狭い範囲を守る戦術を取ることが出来る。強いチームには必ず上手なサイドシューターと強力なロングヒッターがいて、それらがチーム戦術の中で有用な働きをしているものである。

サイドシュートの割合

表1は1994年に広島で開催されたアジア大会での各チームの全得点に対するセットオフェンスでのポジション別の得点や速攻等の得点の割合を示したものである。この数値から各チームの攻撃の特長を読み取ることが出来る。各チームのサイドシュートの占める割合は女子では平均11パーセント強で各チームとも余り差がない。男子では平均13パーセント弱であるが、チームによってばらつきが見られる。

図1、2はサイドシュートのアジア大会での全得点と成功率を示したものである。男女とも本数、成功率において韓国がトップの位置を占めていることがわかる。

図3

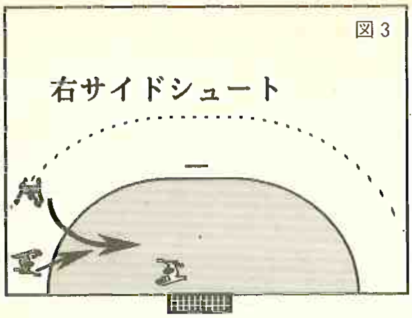




写真1　右サイドにおける右利きプレーヤーのシュート
（'94アジア大会、中華人民共和国、ジャン・ジンミン選手）

サイドシュートのテクニック

ここで言う「テクニック」とはサイドシュートをするときの動作の形を言っている。実際のゲームではこの動きの形をゴールキーパーとの対応場面でこなすわけである。この使いこなしが個人の戦術である。いくらよいテクニックを持っていても、それを使いこなす戦術的能力がなければシュートは成功できない。また逆のことも言える。

サイドでは他のポジションと違ってシュートの角度が小さいので、ゴールキーパーを外して決めるためには、サイド特有のテクニックが必要である。



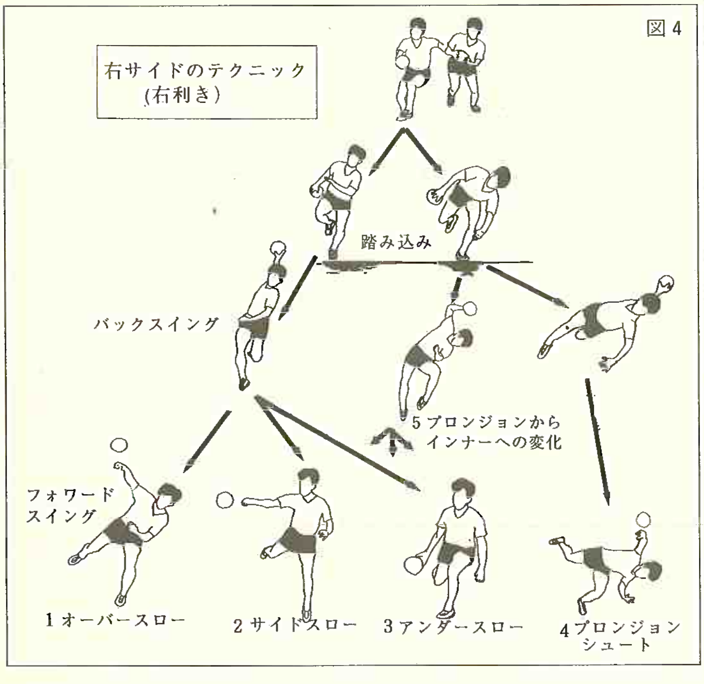
写真2　右サイドにおける左利きプレーヤーのシュート
（'94アジア大会、サウジアラビア、アシリ・モハメド選手）

右サイドシュートテクニック

平成2年に卒業した渡辺洋介君が私の研究室で「ハンドボールにおける右サイドのシューティングパターンについて」の題目で卒業論文を書いた（右サイドは図のようにプレイヤーがゴールに向かって右側のサイドのこと）。

右サイドは左利きのプレイヤーが配置されているのが、トップレベルのチームでは当たり前になっ

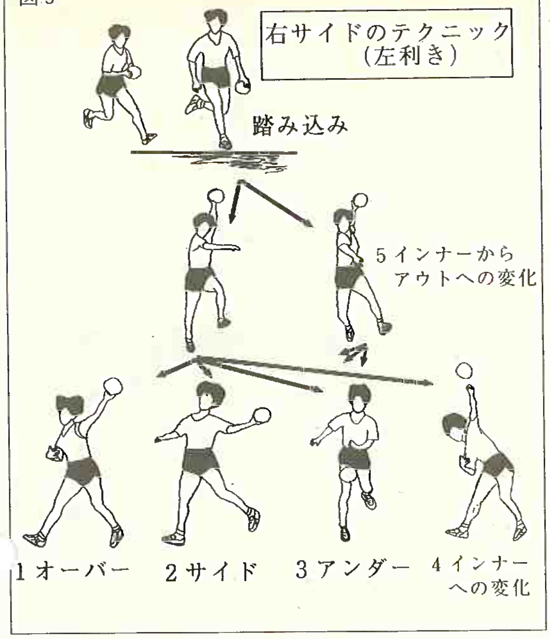
図4



ている。彼は右利きでありながら、右サイドポジションであった。右サイドでは、左利きプレイヤーは右利きに比べてシュート角度が取れ、右サイドから左サイドに至るまで回り込みながら無理なくシュート動作に入ることが出来るので有利である。彼はそのハンデを補うために、プロンジョンシュートをマスターしてサイドのポジションを務めあげたのであるが、この研究を通してサイドの基本的なシュートのテクニックを明らかにしてくれたことはサイドシュートの指導上、大変に有意義であった。

　渡辺君は関東大学リーグの試合30試合を分析して、右利き、左利きプレイヤーともに5つのパターンに分類している（図は渡辺君の原画をもとに修正、加筆、再構成したものである）。

図5



右利きプレイヤーのテクニック

図4は5つのシュートテクニックを示している。

1　オーバースローでのシュート
2　サイドスローでのシュート
3　アンダースローでのシュート
4　プロンジョンシュート
5　プロンジョンからインナー（ゴール側）へ変化させてのシュート

　実際のゲームで最もよく使われるのがオーバースローである。次いでプロンジョンシュートである。

　1から3までは通常のジャンプシュートの要領で、ゴールエリアの中央に向かってジャンプして角度を稼ぎ、シュートするものである。3つの区別はスローする腕の使い方によっているが、高い位置でボールをキープするバックスイングを素早く行うことが後の動作を容易にする。4と5は、より角度を取るためにゴールエリア内で身体を横にしてダイビングするものである。ジャンプシュートに比べ、低い体勢から踏み込むことが要求される。マット運動等で巧緻性を養うとともに、投げた後の受け身（ローリング、スライディング）を修得する事が必要である。

　5のテクニックはプロンジョンを打つと見せかけて、ゴールキーパーを遠目に誘い、サイドやアンダーパスでインコースを狙うテクニックである。

「プロンジョンシュート」の名称の由来

　どなたかこの名称の由来を知っている方がおられたら教えていただきたい。日本では使用しているが、国際的には聞いたことがない。英語版では「ダイビングショット：Diving Shot」である。飛び込むという英語に「Plunge in」がある。この「Plunge in Shoot」が「プランジンシュート」がプロンジョンシュートになまったのではと思われるが。

左利きプレイヤーのテクニック

図5は左利きプレイヤーの5つのテクニックを示している。

1　オーバースローでのシュート
2　サイドスローでのシュート
3　アンダースローでのシュート
4　インナーへ身体を変化させてのシュート
5　インナーへの変化からアウトへ変化してのシュート

　4は通常のバックスイングで体勢を整えた後、上体をずらしてインの方向へ倒しながら位置をずらしてフォワードスイングするものである。

　5はバックスイング終了した時点でインを打つようなバックスイングを行ってゴールキーパーをインスイングでインの方向へ誘い、フォワードスイングでアウトへ変化するものである。

　最もよく使用されるのが、2のサイドスローでのテクニックである。サイドスローによって位置をずらすこのテクニックは左利きプレイヤーの利点と言える。ついでよく使われるのがオーバースローである。

サイドシュートの基本的なテクニック

　大学のトップレベルのプレイヤーは右サイドにおいて右、左利き



写真3　逆足踏み切りによるジャンプシュート（'94アジア大会、大韓民国、ホン・ジョンホ選手）

ともに5つのパターンを持って、ゴールキーパーに対処していることとが分かる。では、一人一人のプレイヤーが全てのテクニックをマスターしなければならないのかと言えば、必ずしもそうとは言えないであろう。一つのテクニックしか持たなくてもシュートのタイミングやジャンプする方向、あるいはシュートコースを変化させることなど戦術的な面によって対処することは可能であろう。しかし、一つのテクニックしかないとなればゴールキーパーも予測の範囲をしぼり込むことは可能であろう。やはりサイドでは得意なテクニックを中心としていくつかのテクニックを修得し、ゴールキーパーの状況に応じて使いこなすことが成功率を高めることになるであろう。

右サイドでは専門的なテクニックとして先ず何を教えるべきであろうか。左利き、右利きともオーバースローはハンドボールの基本として学んでいるはずである。したがって左利きではオーバースローのバックスイングからサイドスローへの変化を、右利きではプロンジョンシュートを教えることからはじめればどうであろうか。

逆足によるジャンプ

右利きなら左足で、左利きなら右足でジャンプするのが通常のジャンプシュートにおけるジャンプ法である。ところが、その足とは、逆の足でジャンプしたほうがよい場合がある。逆足ジャンプは11人制の頃は2段ジャンプシュートと命名されていた。というのは空中へ跳び上がってからバックスイングを行うために空中でもう一度ジャンプしたような錯覚にとらわれるためであろう。実際に実験してみると、確かに右足の方が急角度で空中に跳び上がり、滞空時間も長いという結果が出ている。空中でもう一度ジャンプするような錯覚も、跳び上がってから上体を伸ばし、ボールを持ち上げるので重心が上方に変化するためであろう。

国内外を問わずトップレベルの試合を見てみると、この逆足ジャンプは結構使用されている。特に、左サイドでの右利きプレイヤー、右サイドでの左利きプレイヤーは1対1を突破するステップとの関連からもよく使用されている。

逆スピンシュート

私が初めて逆スピンシュートを見たのは、ユーゴのサイドプレイヤーのイサコビッチである。10年も前であろうか。今では、かなり見る機会も増えてきている。1993年の男子の世界選手権では、かなりの確率で使用され、その曲がり方も相当なもので、まさかというような角度でゴールに入っていく。世界的なレベルでも女子はまだ少ないようであるが、そのうち日本でもサイドシュートにおける基本的なテクニックとして逆スピンシュートが定着するものと思われる（前年のオリンピックソリダリティではルント氏はこのシュートのことをツイストショットと言っていた）。

サイドシュートにおける滞空時間の意味

サイドシュートが成功する要因として技術・戦術的なものを述べてきたが、もう一つ体力的な要因として滞空時間を上げることが出来る。この狭い角度では、滞空時間をかせげるジャンプ力がなければ、シュートボールの出る位置、タイミング、シュートテクニックの選択等限られた状況になってしまう。滞空時間の豊かさが空間の移動を可能にし、またタイミングを選び、そしてゴールキーパーの体勢を判断して、どのテクニックを使用するかを決定できる。競技力は技術・戦術・体力の面から見ることができるが、サイドシュートにおいてもジャンプ力を強化することによって技術・戦術をより可能性高いものへと引き上げてくれる。ジャンプの仕方については、以前の指導法で取り上げたことがあるが、サイドシュート技術をより向上させるために技術（テクニック）・戦術・体力の三面からアプローチしてもらいたい。

ハンドボール選手の骨密度

スポーツ医科学委員：竹内正雄・久木文子（星薬科大）・阿部徳之助・板井美浩（自治医大）・豊島慶男（秋田医療短大）・西山逸成（防衛大学校）

全日本ハンドボール選手は今回のアジア大会において、またしても男女共にトップの座につくことは出来なかった。1988年ソウルオリンピックで韓国男女チームが世界のトップに躍り上がってから、今回の広島（1994年）アジア大会でも韓国男女チームは優勝を果たし、全日本チームはまたしても男女共韓国の後塵を拝した。韓国の強さの基本には試合を通じてフルに動ける強靭なスタミナが誰の目にも明らかに映じている。わが国でも競技力向上のための体力強化が強く叫ばれ、監督、コーチをはじめ、協会関係者が一丸となって体力強化に努めてきた。次回のアトランタ五輪ももうすぐ目の前に近づいて来ている。身体接触の激しいハンドボール競技にとって、身体の大きいことは競技を優位に進める上でも重要な因子であることは誰もが認めるところである。

すなわち、身体の大きい小さいは骨格の発育に大きく影響されるし、一面では身体接触の激しいハンドボール競技の特性から骨折などの障害が多い。ハンドボール協会のスポーツドクター河野[1]の報告によると、ハンドボールナショナル選手の整形外科検診の結果、男女とも大半が何らかの障害を持ち、部位別では足部（足首、指）に多くの受傷がみられ、男女ナショナルチームとも健常者が30％以下であると報告している。このようなことから、今回はハンドボール選手の身体的適性の改善面から骨の硬さ（以下、骨密度と記述）についての測定を試みたので報告する。

対象はハンドボールトレーニングを週6日実施している中学生、高校生、大学生、実業団、全日本選手の男女である。形態は身長、体重、体脂肪率、体力は握力、背筋力、垂直跳びを測定した。骨硬度は超音波法（㈱エスアールエル東京ラボラトリー）を用いた。結果は図1の通りである。

骨硬度についてみると、男女とも一般人（20歳代）と比較すると中学生の男子を除いて全ての選手群が1％水準で、有意に高い値を示した。また男女差についてみると高校生男女の間に有意差（5％）が認められたのみで、その他は男女の間には差は見られなかった。また高校生、大学生以外は女子の方が骨硬度は高い傾向が見られた。

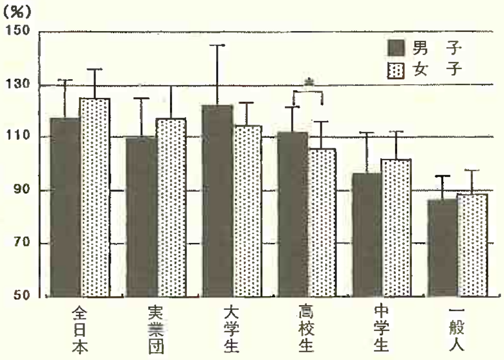


図1 各所属ハンドボール選手と一般人の骨硬度の平均値と標準偏差　＊:P<0.05

このことは少なくとも一般人は日常生活において規則的に運動をしていない群であり、一方、ハンドボール選手は普段1週間に6日、ハンドボールの練習をしている群であることから、ハンドボールを行うことによる影響と考えられる。小沢[2]は各種スポーツと骨密度との関係についても、最も骨密度が高いと思われるスポーツは男子ではウエイトリフティング、柔道、野球、それに次ぐものにラグビー、バレーボール、サッカーを上げている。同様に女子では柔道、ハンドボール、バレーボール、ボディビルディング、バスケットボールが高いと報告している。

これらはいずれも重力に抗して強い衝撃を伴うスポーツであり、これらが骨密度（骨硬度）を上昇させると考えられると述べている。小沢は骨密度と筋力の関係を調べ、脚伸展パワーと骨密度の間には、有意な相関が認められたと報告している。又、井本ら[3]は垂直跳び、立ち幅跳びなどの瞬発的な体力と相関が高いと報告している。

今回の著者らの体力測定では、全日本男女とも形態、体力は他群選手よりも優れていた（表1）。骨硬度と筋力、垂直跳びとの間には男女とも有意な相関関係は認められなかった。しかし一般人と比べると明らかに骨硬度は高い値を示した。

骨の形成には各種のスポーツは骨硬度を増加させるが、スポーツ運動以外の骨密度にはバランスのある食事およびカルシウム摂取、そして日光浴といわれている。今後、ハンドボール選手の体力水準向上の手段としての骨密度と筋力、垂直跳びとの関係についてさらに検討したいと考えている。

（監修：スポーツ医科学委員長　西山逸成）

		人員数	身長 平均値 標準偏差	体重	体脂肪率(%)	握力	背筋力	垂直とび
女子	中学生	18	157.1 (0.4)	48.5 (6.4)	22.5 (9.9)	27.4 (5.2)	83.7 (13.9)	43.4 (7.5)
	高校生	19	155.9 (10.1)	53.5 (4.6)	22.6 (7.9)	30.5 (4.9)	104.8 (15.8)	43.1 (4.3)
	大学生	19	164.5 (5.0)	59.4 (5.0)	21.3 (7.8)	32.7 (4.9)	109.4 (17.1)	45.5 (4.1)
	実業団	15	165.5 (3.9)	60.3 (3.7)	23.1 (8.4)	34.8 (8.4)	113.5 (16.6)	49.3 (3.3)
	全日本	18	167.3 (7.0)	62.3 (5.7)	20.1 (9.0)	40.8 (9.0)	143.4 (21.1)	49.3 (3.2)
		人員数	身長 平均値 標準偏差	体重	体脂肪率(%)	握力	背筋力	垂直とび
男子	中学生	20	159.3 (10.4)	47.6 (10.4)	15.6 (2.7)	33.3 (9.1)	106.1 (32.3)	55.2 (7.6)
	高校生	20	172.6 (3.8)	65.1 (5.7)	15.5 (2.5)	47.8 (8.6)	147.7 (19.2)	62.8 (6.9)
	大学生	18	175.2 (6.7)	69.5 (8.0)	14.7 (1.9)	55.5 (10)	170.9 (18.3)	63.2 (6.0)
	実業団	10	179.5 (6.7)	75.5 (9.0)	15.1 (5.1)	51.5 (10.1)	182.8 (44.5)	67.7 (7.7)
	全日本	16	184.1 (6.5)	80.9 (4.9)	15.3 (4.8)	59.7 (6.4)	194.8 (30.6)	63.6 (5.2)

表1　ハンドボール選手の形態及び体力（平均値と標準偏差）

文献

1）河野卓也：男女ナショナル選手のメデ

イカルチェック結果とスポーツ傷害現況から見た問題点、平成4年度オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告—第16報—No.Ⅱ競技種目別競技力向上に関する研究、日本オリンピック委員会選手強化本部、48—53、1993

2）小沢治夫：スポーツ種目と骨密度、臨床スポーツ医学、11(11)：1245—1251、1994

3）井本岳秋ら：女性の腰椎骨塩濃度と基礎体力、臨床スポーツ医学10(6)：701—706、1993

スポーツ医科学委員会内容

平成6年12月9日(金)に東京体育館第4研修室においてスポーツ医科学委員会が開かれました。西山委員長が議長に就き、ドクター群から浜脇、加藤、河野、木下、板倉、唐沢、研究班から阿部、田中、光島、板井の各氏が出席して下記項目について話し合われました。

一．平成6年度スポーツ医科学研究報告

1　体力トレーニング処方

①男子ナショナル（田中：資料提示）

・1月の測定以降、5月の東アジア選手権に向けて筋量、筋力、スタミナすべてに大幅に向上した。

・7月の測定ではヨーロッパ遠征後の疲れと体力トレーニング不足からか、全体的に若干低下した。

・技術と結びついたが体力トレーニングが必要。

②女子ナショナル（板井：資料提出）

・筋量を増やすための長期的トレーニングと、試合期における筋力発揮の集中力を高めるトレーニングが必要。

③骨密度（阿部：資料提示）

・今年度の測定結果を竹内がハンドボール誌に発表する。

2　メディカルサポート

・スポーツドクター帯同状況（資料）、日本リーグ加盟チーム専従ドクター及びトレーナー（資料）をみると、いまだに十分とは言えない状況である（西山）

・女子ナショナル・ヨーロッパ遠征報告（板倉：資料提示）

・男女ナショナルのコンディショニング業務を業者に委託した（西山：資料提示）

二．強化委員会報告（西山：資料提示）

三．平成7年度研究方向

1　体力測定

・男子ナショナルは田中、女子ナショナルは阿部が担当する。

・フィールドテストを改めて作成、実施していきたい（田中）

2　メディカルチェック

・選手の個票をファイリングする（河野、板倉）

3　ドクター群のチーム帯同方向

・最低でもドクター1名、トレーナー1名の計2名は帯同する。

・予算の調整が必要

・ドクターパック、トレーナーパックを試作する（河野、板倉）

各地の大会結果

関東

群馬県高校新人大会

（11月3、6、20日／高崎東他）

◎男子

▼予選リーグ

A 前橋商40－11下仁田高 前橋商37－7太田商 前橋高29－7太田商 前田商 下仁田高30－4太田商 前橋商29－15前橋高

B 藤岡高21－14高崎工 藤岡高31－7玉村高 藤岡高22－15桐生工 桐生工27－8玉村高 高崎工17－4玉村高 桐生工20－9高崎工

C 富岡実22－21吉井高 吉井高15－10高崎東高 吉井高21－3藤岡工 富岡実30－13高崎東高 富岡実33－10藤岡工 高崎東高17－6藤岡工

D 富岡高28－9桐生高 富岡高54－3太田高 桐生高34－8太田高

▼決勝リーグ

富岡実業 29－18 前橋商業
富岡高校 27－14 藤岡高校
富岡高校 20－19 前橋商業
富岡実業 37－19 藤岡高校
前橋商業 33－20 藤岡高校
富岡高校 21－18 富岡実業

（順位）①富岡高校②富岡実業③前橋商業④藤岡高校

◎女子

▼予選リーグ

A 群女短附24－5下仁田高 群女短附26－9高崎女高 高崎女高20－5下仁田高

B 桐生西高16－5高崎経附 桐生西高34－1太田商業 高崎経附23－4太田商業

C 吉井高校23－8桐生女高 吉井高校21－5前橋商業 桐生女高15－6前橋商業

D 高崎東高30－7富岡実高

▼決勝リーグ

群女短附 29－16 吉井高校
高崎東高 16－10 桐生西高
吉井高校 19－16 桐生西高
群女短附 19－13 高崎東高
高崎東高 24－12 吉井高校
群女短附 22－16 桐生西高

（順位）①群女短附②高崎東高③吉井高校④桐生西高

千葉県実業団秋季リーグ戦

（11月19、20、27日／出光体育館）

コスモ石油 20－17 出光千葉
日産化学 26－22 三井石油化
海上自下総 39－20 東京ガス
コスモ石油 32－19 三井石油化
海上自下総 29－25 日産化学
日産化学 12－0 東京ガス
海上自下総 25－24 出光千葉
コスモ石油 29－16 日産化学
出光千葉 12－0 東京ガス
海上自下総 34－23 三井石油化
三井石油化 19－17 東京ガス
出光千葉 32－20 日産化学
コスモ石油 40－21 東京ガス
出光千葉 34－17 三井石油化
コスモ石油 21－21 海上自下総

（順位）①コスモ石油（得失点差による）②海上自衛隊下総③出光千葉④日産化学⑤三井石油化学⑥東京ガス

近畿

京都府高校新人大会

（11月3～26日／伏見港体育館他）

◎男子

▼予選リーグ

A 北嵯峨25－8日吉丘 同志社12－0洛星 北嵯峨27－6同志社 日吉丘12－0洛星 日吉丘16－6同志社 平安12－0洛星 北嵯峨12－0洛星 同志社19－8平安 北嵯峨29－4平安 日吉丘16－5平安

B 久御山14－6木津 京都西21－9南八幡 南八幡18－7木津 京都西25－17久御山 京都西25－8木津 学園13－9南八幡 久御山12－8南八幡 京都西20－14学園 久御山14－12学園 学園16－5木津

C 山城21－13北稜 東宇治15－9乙訓 東宇治13－6山城 乙訓13－11北稜 山城11－10東山 東宇治17－9北稜 乙訓10－7山城 東山19－8北稜 乙訓11－10東山 東宇治18－14東山

D 洛北27－6両洋 向陽22－4西乙訓 洛北16－11向陽 両洋14－10西乙訓 向陽24－7両洋 桃山16－7西乙訓 洛北22－12西乙訓 桃山16－7両洋 洛北17－10桃山 向陽14－4桃山

E 嵯峨野15－7城陽 大谷17－7田辺 城陽15－6田辺 嵯峨野12－5田辺 大谷26－8堀川 嵯峨野22－8堀川 大谷24－6城陽 大谷15－10嵯峨野 城陽15－12堀川 田辺14－13堀川

F 八幡14－14西宇治 桂16－13洛東 西宇治27－7洛東 洛水14－7桂 八幡24－2洛東 八幡14－11洛水 西宇治15－6桂 洛水14－11西宇治 八幡15－9桂 洛水22－10洛東

▼1回戦

嵯峨野 24－12 久御山
八幡 19－10 乙訓
向陽 18－11 大谷
洛水 16－10 日吉丘

▼2回戦

北嵯峨 27－14 嵯峨野
八幡 18－13 洛水
向陽 18－12 東宇治
洛水 20－17 京都西

▼準決勝



八幡14－13北嵯峨
向陽14－10洛水
▼3位決定戦
北嵯峨21－15洛水
▼決勝
八幡11－10向陽

◎女子

▼予選リーグ
ア 乙訓16－1北稜 北稜11－7塔南 洛北37－1乙訓 洛北49－1北稜 乙訓15－1塔南 洛北64－1塔南
イ 向陽12－0洛西 洛水27－2西乙訓 西乙訓12－0洛西 向陽22－5洛水 洛水12－0洛西 向陽24－3西乙訓
ウ 東稜16－5北嵯峨 桃山10－3南八幡 南八幡14－11北嵯峨 桃山15－14北嵯峨 東稜10－3南八幡 東稜11－8桃山
エ 府立商23－5西宇治 東宇治19－8精華女 府立商20－6精華女 東宇治17－5西宇治 東宇治11－10府立商 西宇治15－10精華女
オ 桂6－6明徳商 京都女20－5光華 京都女27－2明徳商 光華9－9桂 光華9－7明徳商 京都女26－7桂
カ 日吉丘21－4西山 山城22－1学園 日吉丘17－3学園 学園6－5西山 城南11－6山城 日吉丘8－5山城 城南20－6西山 山城13－2西山 城南14－7日吉丘 城南21－3学園

フリースロー
「ブーイングは賛辞」

企画・広報委員　早川　文司

ハンドボール関係者の皆様、明けましておめでとうございます。今年ますますハンドボール界が発展するよう願っています。

日本リーグもいよいよ天王山。激しい星のつぶしあいを続け、楽しみは最後まで残しておいてほしいものです。

ところで、最近よく聞く言葉に「ブーイング」がある。観戦に訪れたファンが怠慢なプレーなどに対して不満を表すパフォーマンスであることはご承知の通り。もともとは音楽会や観劇公演などで不満や不服を表すことだったようだが、今は広い範囲で使われている。

この「ブーイング」をハンドボール会場ではあまり聞いたことがない。時にはどんどんブーブー言って欲しいのだ。なぜかというとハンドボールを理解しているからこそ言えるからだ。もしも、つまらないミスやだらしないプレーが見られたときは、遠慮ない不満、不服が会場を包んでもいいと思う。

日本のスポーツ界は、サッカー・Jリーグの成功に刺激されてか、プロ化を目指す動きが出ている。社会ではスポーツに関心を持つ人が増えている。しかし、内容が伴わなければファンにそっぽを向かれてしまうだろう。ファンを大切にしなければ、プレイヤーは中身の濃いプレーやゲームでお返しするのは当然だ。だからこそ、だらだらゲームにはブーイングのオクターブが高まることを逆に期待したいと、常日ごろ思っている。

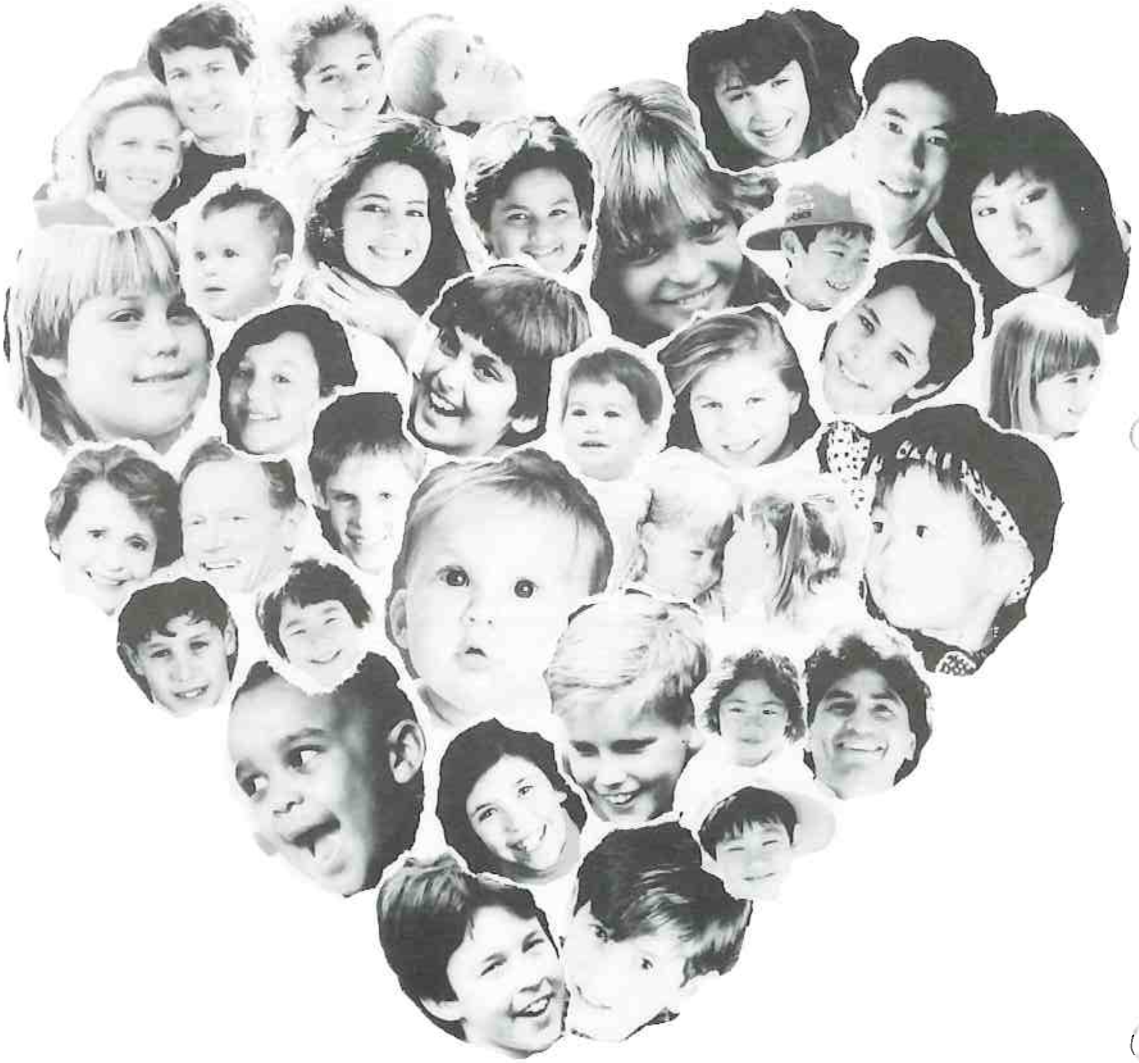
というのは、ブーイングは選手を成長させ、ひいてはハンドボール界の発展につながる〝ありがたい神の声なのだ〟と思っているからだ。

選手・関係者にあえて言いたい。「ブーイングは最大の賛辞なのだ」と――。

1995年の初めに当たり、ほのぼのとした話題でもと思ってはいたが、またまた苦言を呈してしまった。しかし、これもハンドボールを愛し、ハンドボール界の発展を願ってのこと。お許しを願いたい。

今年もどうぞよろしく。

▼1回戦
洛水21－6光華
城南18－17桃山
京都女15－13府立商
日吉丘20－5乙訓
▼2回戦
洛北27－5洛水
東宇治10－8城南
東稜15－13京都女
向陽15－5日吉丘
▼準決勝
洛北43－2東宇治
向陽11－10東稜
▼3位決定戦
東稜20－5東宇治
▼決勝
洛北13－11向陽



(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第三四九号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
平成七年一月二六日 印刷
平成七年二月一日 発行
東京都渋谷区神南一―一―一
電話 代表 三四八一―二三六一
振替 〇〇一二〇―七―一〇二九三
編集兼発行人 中澤重夫
定価三百五拾円
(年間購読料三千三百円)

